
まいであとうたーBY魔王

大川 よしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まいであどうたーBY魔王

【Nコード】

N80140

【作者名】

大川 よしの

【あらすじ】

どこの世界の父親も、年頃の娘は心配なものです。けれど過干渉も度が過ぎれば如何なものでしょう。親の愛がうざい難しいお年頃との距離を測りかねると、とんでもないことになりますよ？ねえ最愛の娘に家出された魔王様？

本編は魔王様の愛娘エヴァリーナの独り立ちのお話。幕間にてその頃のお様を実況していきます。

【1】我慢の限界

チチ、チチ、と小鳥の囀りが聴こえ、窓からは柔かい朝日の光が差し込む。

「……お」

石造りの広い食堂、長い食卓に染み一つ無いテーブルクロス、香り立つ紅茶。

「…お」

壁際にずらりと並べ立つ給仕の者たち。

「お」

爽やかな、そしていつも通りの城の朝の風景である。朝食の片付けが済んでしまった給仕達は、食後の紅茶を楽しむ主とその娘を和やかに見守っているし、執事はその直ぐ脇で今日の予定を切り出す間を図っている。いつも通りである。主が愛娘に向かって延々と語りかけているのも。

染まった頬を隠すように俯いて、体を震わせている娘以外は、本当にいつも通りであった。

「お」

「…お？」

ひたすら母音を繰り返し続ける娘の異常に、やっと気付いた主は、どうしたことかと首を傾げる。娘の震えが、止まった。

かと、思えば、

「お父様の馬鹿あああっ！！大っ嫌い！！」

城の端にいた者にまで聞こえる全身全霊有らん限り力を込めた叫びを一つ、主に向かって叩きつけた。

慎ましくたおやかな娘の突然の行動に、その場の誰もが目を剥く。あのお嬢様が、主に向かってあのようなことを？所謂ファザコンのお嬢様が？とうとう反抗期？

周囲の動揺を他所に、当の本人は食堂から走り去ってしまった。

勢い余って倒した椅子も、零れた紅茶も、慌てる給仕も、執事に支えられ「お気を確かに!!」

と声を掛けられている半死の主も、一切合財無視して。

++++

布張りの豪華な長椅子に身を投げ出し、エヴァリーナはぐったりと息を吐きだした。思い返すのはつい先ほどの食堂での出来事。あんな大声で、小さな子どもみたいに、はしたない真似をしてしまった。衝動に任せて言ってしまった言葉がさらに気分を沈めていく。

こんこん

ノック音が部屋に響いた。…ドアからではない、部屋の中に直接音だけが降って湧いたのだ。奇怪なことだが、さして気にせずエヴァリーナは入室を許可する。

「どうぞ」

「お邪魔します」

思っていたより早く、近い所から返事が返ってきて、エヴァリーナは慌てて飛び起きる。

「…おじ様、ドアから入って来て下さい」

「ノックはしたよ」

長椅子の端に、いつ入ったのか男が足を組んで座っている。だらしない姿を晒したことに羞恥を覚え、今更だが姿勢を正し、エヴァリーナは男と向き合う。

見知った、気安い仲ではあるが、空間跳躍でレディの部屋を訪れるのは如何なものか。そういった意味を込め睨んでみても、飄々とした態度を崩しはしない。

「魔法で空気を振動させ、わざわざノックに近い音を立てるなら、初めからドアから入って来ればいいのに」

ぼそぼそ呟いてみせても、肩を竦めて曖昧に笑うだけで、改めるつもりはないらしい。

何を言っても無駄である気はしていた。まあ、別に困る訳でもない
ので結局エヴァリーナが折れるのだが。

居住まいを正したエヴァリーナに、紅茶の注がれたカップが差し出
された。くるんくるんと手首を翻すごと、その手からポットやら茶
菓子やら出て来て、瞬く間にお茶会の準備が整う。最後に、ぽんっ
と手を叩いて、花瓶から鮮やかな花々が咲き誇った。何やら得意げ
に笑う男に、エヴァリーナもつられて笑ってしまう。

「それで、」

次の瞬間には、その笑みはころりと面白がるようなものへ変わって
いた。

「可愛いお嬢さんは、一体全体何に拗ねているのかな？」

男は単刀直入に切り出す。先程の騒ぎは知っているだろうし（あれ
だけ大きな声を出せば当然だ）、それを聞くためにわざわざ出向い
て来たのだろう。ひょっとすると城の主たるエヴァリーナの義父が
行けと懇願したのかもしれない。

聞かれるとは思っていたが、こんなに早く、尚且つ直球でこられる
とは予想していなかったエヴァリーナは、口の端を引きつらせなが
ら、今日何度目かのため息を吐くのであった。

【2】限界までの経緯

かつてエヴァリーナの世界は、城の中とそこに住まう者達という極々狭いものであった。というのも、エヴァリーナの養父が彼女を殊更可愛がり手元に置きたがったという、なんとも過保護な理由からである。

けれどもそれは親の愛という殻に包まれた、小さな子供にとっては真つ当な大きさの世界であり、まだ不自由とも呼べない束縛であった。

そんな彼女の小さな世界を、徐々に少しずつ広げていったのが、ジョリー小父である。エヴァリーナの養父の友人で、彼女にとってはおう一人の親と慕う人物であった。ジョリーの奇抜で派手な紅いローブに纏わりつき、よく話をせがんだことを覚えている。いつだって彼は目を細めて抱き上げ、遠い外の話を聞かせてくれた。

人なりを表すように、ジョリーの話は奇想天外奇妙奇天烈摩訶不思議の荒唐無稽で突拍子もないことが多く、話の最後はいつも、「それは本当のこと？」と問うエヴァリーナに「いつか確かめに行つてごらん」と微笑んで締めくくった。今思えば、あれは外への興味を持たせるための誘導だったのではないか。エヴァリーナの世界が小さなまま閉じてしまわぬように、好奇心を掻き立てて。

「お外に行つてみたことはないかい？」

全てはこの一言に頷かすためのお膳立て。

そうして、エヴァリーナは生まれてから一度も出たことがなかった外の世界へ、お出掛けを許されるようになったのであった。（余談ではあるが、育て親二人の間で何やらやり取り（舌戦）があったらしい）

養父とジョリー、あるいはどちらかの同伴が必要であったのと、幾つか約束事がありはしたが、それでもエヴァリーナにとって少しも苦にはならなかった。寧ろ大好きな二人がずっと側にいてくれる嬉

しさが勝った。

『お出掛け』は、年に数度の頻度で、数日からひと月程の期間、様々な大陸、国、都市を物見見物する。つまり世間一般の旅行と同じである。

主に同伴はジョリーがしてくれて、時折養父が不承不承着いて来るといった具合あった。誰の目にも明らかな程、エヴァリーナの『お出掛け』を厭うていた養父だったが、愛娘に嬉々と強請られては聞かない訳にはいかない。かく言う養父も、普段は人間社会に関わらない暮らしをしているせいか、エヴァリーナとそう変わらない箱入りぶりで、行く先々を珍しげに目を細めて眺めていた。それ故か迷子回数はエヴァリーナよりも多い有様であった。

さて、この『お出掛け』を三人でしていたのは実は数年ばかり前の話である。エヴァリーナが大きくなるにつれ、ジョリーが城を空けることが多くなったのだ。元々彼は、エヴァリーナの育児の助っ人として呼ばれただけで、城の住人ではなかったのだ。エヴァリーナは、少しばかり残念ではあったのだが、ジョリーはちよくちよく顔を出し、外の話をしたり、何かと構ってくれていた為、思ったより寂しいという気はしない。その代わりに、それまで以上に養父が構うようになって、積極的に『お出掛け』へ連れて行ってくれるようになったのが嬉しかった。世間知らずの箱入り父娘、二人旅。周囲から異様に心配されはしたが、概ね問題の無くやってこれていた筈である。

…半年前までは。

＋＋＋

「お出掛け、私、本当に大好きなんです」

うんうんと相槌を入れながら、昔に思いを馳せていたジョリーは、エヴァリーナの表情が徐々に曇っていくのに気付いた。怪訝そうに眉をひそめ、エヴァリーナが続けるのを待つ。

「なのに、突然、お出掛け、なくなってしまうって……」

最初の異変はエヴァリーナが『お出掛け』のおねだりをした時に現れた。丁度、北大陸モガリ地方で金夜祭の開催する時期である。年に一度雪の季節に、月の精霊の降臨を祝う祭りは他大陸からも、観光客が訪れる有名なもの。降臨に際し、夜の雪原が金色に輝く姿は、死ぬまでに一度は見ておきたい絶景だと言われている。

それを見に行けたら、と。切り出したわけだが。

「駄目って？」

「いえ、そうはっきりした言い方ではなかったのですが……。なんだが遠回しにはぐらかされて、そのうち有耶無耶になってしまったんです」

その時は忙しかったのだろーうと思い、さして気にせず終わった。寧ろ、考えなしに誘ってしまったことを申し訳なく思い、暫らく大人しくしていようと心に決めたのだった。

ところが、である。

「外出のお誘いがなくなったばかりか、私がちよつとでも外の話をすると逃げられてしまつて……。それがどんどん露骨になってきて」

『最近寒くなってきたがお前は大丈夫か風邪など引いては大事だ何風邪といって舐めてはいけない万病の元と言うだろう言うらしい言うとな奴が言っていたそうだアルヤツクの羽毛布団を送ろう絨毯とカーテンも新調しよういっそ部屋の防護結界式ごと改造して自動室温調整機能でもつけようそうしようでは今から取り掛かからせる』

しまいにはこれである。通常ならありえないような饒舌さで捲くし立て、こちらの言葉を一切封じた挙句、一人で納得して話を終わらせて颯爽と立ち去ってしまう。ここ二ヶ月ほど顔を合わすたびにこんな感じである。

「それ、は：なあ」

「ええもう、なんというか」

いい加減うざくもなってくる。

それで至った結果が、現状である。

【3】結果とその原因

父娘とはいえ、他人同士。生活のサイクルが違えば、必然一度も顔を合わせないで日を終えることも。広い城の中では偶然ばったりを期待することも出来ない。故に朝食だけは一緒に、と決めていた。

「それが、よく分からん口上をつらつらひたすら聞かされ、何も言わせて貰えず仕舞い毎朝毎朝2ヶ月」

「つらかったです」

それは一種の虐めなのではないだろうか。

「で、さっきのあれかい？」

「……聞こえちゃいましたか？」

「そりゃもう。庭園に居たけどはつきりばっちり」

「そ、そんなに遠くまで……」

「魔力が籠もってたからねえ、城の防護結界に跳ね返って相当響いたみたい。寧ろそれ狙ってやったのかと思ったんだけど」

「いいえ、全くそんな意図はありませんでした」

エヴァリーナが俯きがちだった顔を、恐る恐るあげる。ひたと見つめてくるジョリーは笑みを浮かべた儘だったが、どうもその質が変化していた。感情的になって一瞬でも自制出来ずに魔力を暴発させたことを咎めているのだ。

「ごめんなさい」

自然と謝罪が口をついて出てくる。

「わかってるなら俺が言うことは何も無いけどね」

自覚し反省しているなら別にいいと。ジョリーはさっと、この話はこれでお終いだと、明るく口調を変え切り出す。

「で、原因に心当たりある？」

「……ないこともないです」

養父との二人旅は基本が各国の観光地巡りであった。その時も諸国連合を転々と渡り、普段目にするのではない異国の情景を楽しんだ。小規模の島国が無数に連なる諸国連合は、島同士は肉眼で目視出来る程近いのに、隣同士でも全く違う文化形式をしているのが面白い。連合間であれば国を自由に行き来できる為、人や物資の流通が盛んで、非常に活気のある国々である。

ただ、活気があり人も多くなれば、自ずといざこざも増えるというもの。その辺りは一応心得ていたのであるが、用心していれば絶対巻き込まれないということもない。端的に言うなら、そんな事態にエヴァリーナが遭遇し、養父が切れた訳だが・・・

＋＋＋＋

「はいはいはい、ちょっと待ってそれ初耳ですけども」

「それはそうですよ、おじさま居ませんでしたし。話自体半年前のことですし」

「それはそうですとも。いや、そこじゃなくて、あいつ切れたの？あれ程口酸っぱくして言い聞かせてたのに切れたの？被害どんなもんですか？」

ジョリーがせっついて聞いただそうとするのも無理はない、養父が我を失い暴れたとして被害は最早災害の粹に達し、それが街中であれば人的被害も有り得る。故に、決して、出掛けた先では、平静を乱すな問題を起こすな人様に迷惑を掛けるな大人しくしている絶対にと、かなり厳しく言い聞かされていたのだった。

「深刻な被害は多分出てません・・・多分ですけど。お父様が暴走する前にその場から連れて城まで帰ってきましたから」

「おお、勇者、勇者がここに居る。というかよくやった偉い手放しで褒めるよ偉い」

よしよしと小さい子供にする様にジョリーはエヴァリーナを撫でた。

世界広しと言えども彼女の養父を止められる者はそういないだろうから、十分賞賛に値する偉業であった。

撫でられるがままくすぐったそうに身を振っていたエヴァリーナであつたが、まだ詳しく話していない肝心の原因が自分にあることを思うと、素直に喜べない。そつと、ジョリーの手を外しその目を見ると、彼は何を考えたのか分かったのか、居住まいを正し話の促してくる。

「で、どんなトラブルだったんだい？」

「ええつと、簡単に言うなら・・・」

「うん」

「・・・男の人に声を掛けられました」

「ナンパですか」

＋＋＋＋

街中を歩き回るのに疲れて、小休憩を取っていたときのことであつた。養父をベンチに残し、エヴァリーナは近くの売店で飲み物と軽く摘める菓子を購入に行っていた。（財布と購買決定権はエヴァリーナが持つことになっている。養父が買い物下手だから）いざ戻ろうとした時、若い男二人組みに声を掛けられたのだ。年齢はエヴァリーナとほとんど変わらないよう見え、浮かべた軽薄そうな笑みは、どうにも嫌な感じがする。断りを入れて立ち去ろうとすれば、行く手を塞ぎ馴れ馴れしく肩に触れてくる。不快を示しても一向に引く気配の無い二人組みに、幾つか対処を考えていると、途端、肺の空気が破裂したような痛みが駆けた。

視線を上げると、エヴァリーナと同じように凍りつく二人組みの向こうに見知った人が立っていた。さっきの痛みは彼の人から放たれた威圧が全身を竦ませた結果の錯覚である。

「お、とうさま・・・」

つう、と目があつた。冷ややかな目に尋常で無い怒気が宿っていた。

あ、うん、駄目

直感である。だっ、と二人を避け、養父の元まで走ると、その腕を掴み一気に転移術式を発動させ、郊外に跳んだ。

街中の人目がある所で使うような代物ではなかったが、下手をすればその街ひとつが消滅しかねない状況では構ってなどいられない。特にあの二人組みはまず命は無かったであろう。不快な思いもしたがもうどうでもよかった。顔面蒼白になり、脂汗まみれになって、それを通り過ぎたときにしたあの臭いは・・・、いや皆まで言うまい。男として些か情けない思いをしただろうから、きつと懲りただろう。後は、頭に血の昇った養父を説得し、何とか城に帰ってきた訳である。

++++

「と、まあ、このような感じでして。それからです、お父様の態度がおかしくなり始めたのは」

「なんだ勘ねてヘソ曲げたんだな」

「・・・やっぱりそういうことですよね」

つまり、エヴァリーナに男が寄ってきたことが非常に不愉快で気に食わなかったらしく、じゃあもう二度とそんなことがないように、外に出さなければいいという結論に勝手に至ったようだ。

何となく、そうじゃないかと思いつつも、流石にそれはないだろうと打ち消してはきたが、養父と付き合いの長いジョリーがあっさり言うのであればもう間違いない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互い何も言う気が起きなくて出来る沈黙とは、こうも色濃く疲労が滲むものなのだと初めて知った。

【4】家出と教唆

すっかり冷めてしまった紅茶を淹れなおし、一旦一息ついたところで、ジョリーはそつとエヴァリーナを窺った。

物憂げに俯いて紅茶の水面に目を落とすその姿は、それだけで一枚の絵画になる。そう、エヴァリーナは美しいのだ。柔い光を放つ金の髪と蒼穹を思わせる瞳、透き通る白い肌に淡い桃色の唇、すらりとした四肢ときゅうと細い腰。天辺から爪先まであらゆるパーツが、一級の職人が丹精込めて作り上げた美術品のような繊細さを持って彼女を構成していた。女神。そんな表現ではまだまだ足りないが、他に言い表しようのない美貌。

すれ違えば十人中十人振り返るだろう。声を掛けられて当然とも言える。だからジョリーはこれまで、エヴァリーナに自身の容姿についてと、それが引き寄せるであろう諸々への対応を教えてきたつもりである。その甲斐あってエヴァリーナは比較的こういった類の厄介事を避けてこられた（同格の容姿の持ち主である養父の存在と、ジョリーのフォローで回避していた部分もあるが）。

ナンパなんて正直一々数えていられないほど経験しているので、本当なら簡単に往なして終わりだった筈である。だが、今回は運悪く現場に養父が居合わせ、彼の逆鱗を見事についてしまった。

（だからといってそれは協定違反だね）

ジョリーは過去二人で取り決めたものに一瞬思いを馳せる。些か酷な気もするが、自業自得であるから同情は微塵も起きず、よって相応の報いを受けてもらうことにした。

差し当たってはエヴァリーナの方をまずどうにかするべきだろう。

「で？」

思考に没頭していたのか、弾かれた様に顔を上げたエヴァリーナに、淡々とした口調でジョリーは話しかける。

「で？どうするの？」

「どうする、って：」

「半年だね、半年。約半年間、君とルドの親子関係は非常だった。まともな会話も儘ならずルドは君の言葉を塞ぎ続け君は鬱積を続け、多分このまま何もしなければずっとこんな状態だろう、やあー悪化するかな？外に出れば誰かれ寄ってくる。なら城外へ出さなければいい。来客が興味を示すかも。なら目に触れないようにしよう。使用人が懸想でもしたら。なら会わせないようにしよう。・・・そうして気づけばお部屋から出して貰えなくなりました、と」

一息に言い切る間、エヴァリーナの顔面から見る見る血の気が引いていった。唇が僅かに開閉し、なにか形にならない言葉を紡いだ。

『おとうさまは』『そこまでは、』と動いたように見えたが、それを無視して続ける。

「まあ、行き過ぎた妄想であると否定はしないけれども、でも俺も君も否定し切れない。違う？だって感性だが観点だがが前提段階で食い違っているんだもの。救いなのはこれが、人間と魔族の相互理解不一致じゃなくて、父と娘の感情の行き違いから端を発しているあたり？いやはや」

「・・・」

そう、お父様ことエヴァリーナの養父ルドヴィークは生粋の魔族で、ついでに言うとな魔王だった。でも今は関係ないから割愛しよう。

「で？どうするの？」

「・・・小父様はどう思われますか」

「君がしたいようにすれば」

笑んだまま突き放すようにすれば、ますます顔を悪くして俯く。ジョリーとて憐憫の情ぐらい持ち合わせているから、内心は居た堪れない。だが素振りには出さない。

「選択肢は君が考え付く限りだね。現状維持も結構。正面切ってカチコミ行くのも良し。物を壊すなり喚き立てるなり反抗と抗議の意思でも見せてみれば何がしかリアクションあるかもね。ああ、それはさっきやったか。・・・あとは穏便にすましてみるかい？『もう、

お出掛けはしなくていいです。ずっとこの城でお父様と皆と一緒に暮らしていきます』とでも言えば満足して普段通りの態度に戻るんじゃないかなあ。というかこれが一番円満解決しそうですね。

でもこの方法、確実に人間社会とは切り離されて、二度と関わられなくなるだろうね」

「・・・わ、たしは、」

茫然とエヴァリーナは呟く。

「私、は、いつか、・・・この城から離れて、一人で生きていくのだと、・・・思っていました」

「そうですね。俺もそのつもりで君に色々教えてきたんだけど」

「私が、人間だから」

「そうだね。君はここで唯一の人間だから。・・・でも勘違いしてはいけないよ。誰も君を厄介払いしたいなんて思っていない。人間は人間の世界の方が幸せになれるんじゃないかっていう一つの考えがあるから。君がそれを選んででも皆祝福するだろうし、ここに残ることを選んでも喜ぶだろう。むしろ諸手を挙げて大賛成するだろうね」

「ええ、はい。・・・お父様は、私が一人では生きていけないと、思っているのでしょうか？」

「逆。君が居ないとあいつは生きていけないの。そう思ってるの」
目が、くりっと丸くなった。驚いたような顔はあどけない幼子その時のまま、懐かしさでジョリーは頬を緩めた。

「俺が君に世界を教えてきたのはルドに頼まれたからだ。あいつは君に、人間として普通の生き方が出来るようになればいいって思ってた。でも、君にいつまでも傍に居て欲しいとも思ってた。年々後者の比率が多くなってきてたんだろね。で、ナンパ。誰かに君が奪われる危機が、いずれくる別離をリアルに想像させた。怖くなつたのだろうね、これから先の『君の人生に自分が居ない』ことが「・・・どんな誰だって、そういうことが起きます。他人と付き合っていくうち必ず」

「ああ、でもあいつは知ってはいても分かってなかった。だから慌てたんだろう、混乱したんだろう。なんとか自分を安定させようと躍起になって、君を顧みる余裕をなくし、誤魔化すうちにこのまま有耶無耶にしてしまえばいいと魔が差した、かな？」

「……」

魔が差して、軟禁状態にされた方は堪ったものではない。流石にこうも身勝手な都合で振り回されていると分かれば、エヴァリーナも腹が立つてくるというものだ。だからと言って、養父の気持ちも分からなくなるとなると、本当にどうしようもなくなってしまう。

途方に暮れるエヴァリーナに、ジョリーは静かな微笑を向け続けた。
「……お父様と、お話出来れば」

「今朝のあれで君が怒っていることが分かったから、多分逃げちゃうんじゃないかな」

「小父様、捕まえて」

「やりませんよ？話がしたいなら自分で捕まえに行きなさい」

「ですよね……。って、お父様が本気で逃げたら私に捕まえられる訳ないじゃないですか」

「八方塞だね」

「小父様、協力」

「しませんよ？」

にべも無い。有言実行、言ったからには何もしてくれない男である。食い下がるだけ無駄だと悟ると、エヴァリーナはずるずると背もたれに体を預けた。はしたないとは思ったが、身内に見せる分にはジョリーも喧しく言ったりしないので、気兼ねはない。

「……毎日、本読んで、皆とお話して、お庭に出て、三食食べて、しっかり寝て、ずっとそれだけ。平穏だけれど、とても退屈」

「平穏とは詰まらないもの。でもそう思えるのはとても贅沢で幸せなこと」

日々生きていくことにだって精一杯な人々が外の世界にはごまんといる。そんな人々から見ればエヴァリーナの悩みなど贅沢の極みで、

嘔飯物の嫌味である。それが分からぬエヴァリーナではないが、こ
うも簡単に片付けられてしまうと、面白くは無い。エヴァリーナは
我ながら幼いと思いつつ、むう、と唸った。

「・・・でも私、外、行きたい」

「行けば？」

あまりにもあっさりしていたので、一瞬間逃しかけた。ぽかんと
した顔でジョリーを見た。

「は？」

「いいじゃない、君がしたいようにすれば」

「え、いやだって、外に出るにはおじさまかお父様が居てくださら
ないと駄目だって」

「俺たちが連れて行く『お出掛け』は、ね。あれは行楽と社会勉強
が主で、保護者同伴は当然だった。君は被保護者だったから。でも
ね、君が大人になって自活する為に自分の意思でここから出て行く
ことを制限する約束事ではないんだよ」

つらつらと、何でもないことのように告げられる言葉に、今まで悩
んできたことってなんだったんだとエヴァリーナはやや回りの遅い
思考の端で思った。結局のところ難しいことを考えるまでも無く、
したいようにすればいいらしい。ジョリーの言い分も終始それに一
貫していたことに気づいて、またも呆然となった。

「・・・なんだか凄く屁理屈っぽい気がするのですが、要約すると
独り立ち可ってことですか？」

「問題はないね」

「いいんですかそれは」

「いいんですよ」

ジョリーはエヴァリーナを見据える。

「家出って親に断りを入れてするようなものじゃないだろう」

悪童のような笑みにつられて、エヴァリーナも笑みを浮かべた。

【幕間】親の水面下の争いを子供は知らなくていい（前書き）

「さて、第一話でちょい出てそこからまるで出番のなかった魔王がやっと登場します」

「本当にな。お前が回りくどいのが悪い。前後説明に一体どれだけ費やした」

「うん、確かに俺は回りくどい。でもお前は面倒臭い鬱陶しい相手するのが疲れる。このまま出てきたところで更に状況は深刻化して一歩も進みそうもないからもういつそのこと不在にして話を進めようかという案が持ち上がったってんだけど」

「タイトル！！タイトル見ろ何故看板に登場しておいてボツキャラ扱いされねばならんだ！？」

「題名チェンジ可だし。うんそもそもね」

「なんだ」

「俺も親で間違いじゃないし、なら最後のb v魔王をb v愚者にすればお後がよろしいというか」

「よろしくないさり気なく自虐を交えるなお前の称号は賢者だろう」

「愚者も通り名ではあるよ？」

「：：もう、いい。いい加減本文に入るぞ」

「ああ所で、今話は幕間だから実は本編ですらなかったり」

「！！」

「扱いとしては番外編？」

「！？」

「ではお楽しみ下さい」

【幕間】親の水面下の争いを子供は知らなくていい

「主様」

「なんだ」

「大丈夫、で御座いますか？」

「……聞くな」

暗きものの主。魔竜の血脈に連なる者。銀鱗の君。その他e t c. e t c. e t c. 彼の者を讃え恐れ呼ぶ名は数多。秘されし地を統べる魔王、ルドヴィーク。

緩く縛り背に流した白銀の髪。それより少し濃い色合いの瞳。雪より白い肌。すつと通った鼻梁。顎のラインはシャープで、どこか硬質な雰囲気を出している。他を圧倒し魅了する美貌を有した男であった。今その顔は苦悶に満ちて、普段は冷然としている目を陰しく殺気立たせている。

その直ぐ脇に控えている初老の執事は、そんな主を痛ましそうに見ていた。あまりにも険しい表情に愚問とも思ったが、聞かずにはおれなかった。結果は、前出の短い、だけど切実な何かが伝わってくる一言だった。

ルドヴィークは、破壊を司る絶対の強者は今、自室、中央、床にて、……正座をさせられていた。

＋＋＋＋

ルドヴィークの自室のその光景に、やらせたのは自分でありながら何故だかジョリーは目頭が熱くなった気がした。魔族と魔物の頂点に位置する男の哀愁漂う正座姿。その隣で待機する忠実なる僕の存在が余計絵的に憐憫を誘う。なんかこう、がっかりだった。非常に

残念な感じだった。

実はジョリーは昨日放浪から戻ったばかりで、挨拶も満足にしていない。一応ルドヴィークとエヴァリーナが出迎え歓迎してくれたが、かなり遅い時間だったので、早々に引き上げたのである。その時の二人の様子が目に見えておかしかったが、明日にでも事情を聞けば問題無いだろうとジョリーも休んだ。それで今朝の、エヴァリーナの『大嫌い』発言である。庭園の隅まで拡声された叫びに、ぎょつとし、すぐさまルドヴィークの元へと急いだ。狼狽しきったルドヴィークに、エヴァリーナと話をできて欲しいと懇願され今度はそちらに出向く際、みつともない姿に思わず正座待機を命じてしまった。まさか本当に正座しているとは思わない。律儀過ぎるだろう魔王。

複雑な感情を溜め息で吐き出し、ジョリーは室内のソファに移動する。正座したルドヴィークに向かい合う形で着席すると、丁度見上げてくる視線とかち合った。この部屋どころか、この城の主で、この地の支配者を正座させ、自分はソファで脚を組んで見下ろす。一体何様のつもりなのか。取り敢えず今は棚に上げておこう。

「……で、話聞いてきたんだけど」

「……」

「正直さ、一々煩わしい問題起こさんで欲しいんだけど」

「……」

「何時までもここに来るつもりないし、ぶっちゃけもうお役御免だと思っただけ」

「……」

ひたすら目を逸らし、沈黙を続けるルドヴィーク。気まずいのか、足が痺れているのか（やたら頑丈だが魔族だって血は通っている）、反応をまるで示さない。

「人と話すときは目を見て話しましょう、これ基本的常識。つか闇の化身が敵前逃亡してんじゃないよ。……足蹴るぞ」

「……私だって不本意な事態だ」

やっと応える気になったらしい（最後に付け加えた一言に怯えたとしたら情けない話だ）

「自業自得だろ」

「何が悪いと言うんだ」

「え、そっから入らないと駄目なの？」

「娘に群がる害虫を駆除しただけだろう」

「駆除っていうか抹殺しようとしてただろ。いやそのことはその点以外別にとにかく言うつもりはないが……。問題なのはその後のエヴァリーナに対する態度だよ」

ぐっ、と言葉に詰まる辺りルドヴィークにも自覚はあるようだ。

「約半年間まともな会話が出来てないそうだね」

「会話は、してたとも」

「一方的にてめえがぐっちゃべるののどこが会話だ。意思疎通不能な時点で単なる独白だっつーの」

「あの子は黙って聞いてくれていた」

「訳分かんないこと延々捲くし立てられれば誰だって黙るわ。寧ろ黙らせるのが目的だっただろ。あーあーエヴァも可哀そおにー大好きなお父様とお話だってあの子にとっては大事な日課だったてえーのにーそのお父様のつまんない嫉妬心と独占欲と我が儘で平穩ぶち壊されちゃってーのーああ可哀想かわいそカワイソー何が可哀想ってお父様はエヴァが何も言えなくてもまるでどうでもよくて自分が喋れば満足などこだよねーあーエヴァ超不憫」

「ぐっ、いや、待て」

「・・・手放すのが惜しくなったのかい？」

がらりと、声の調子が変わる。嫌味で人を馬鹿にしたような笑みも剥げ落ちて、そこには底知れぬ微笑が残った。

「そうだねえ、美しく育ったものね。手元に残しておきたくなるよね。誰の目にも触れさせたくないよね。誰のものにもしたくないよね。自分だけのものであって欲しいよね。大事に大事にしまっておきたいよね。このまま、どこへも行かず、自分の傍に居て、ずっと

ずっとずっとこのまま・・・」

「止める」

「いいんじゃない？」

ルドヴィークも、執事も、まさかここで肯定するとは思わず、耳を疑った。

「魔王にとっちゃ人間なんて虫けらと同義だろうに、それをどうこうするのにどうして躊躇がいる？ いいじゃないか、お前の所有物にしたら。そうすれば大層見目麗しいお人形が一体、手に入るよ」

「き、貴様ッ！！あの子を何だと思って・・・！」

「はあ？何言ってるのさ」

心底嘲るように鼻で笑って一蹴する。

「もっかい繰り返すけど、半年間、お前はエヴァの言葉を封じ続けた。何も言わず、あの子の意思を封じ続けた。ねえ、でもそれでよかったんだろう？あの子が何を思おうとも、どうしていようと関係ない、あの子がここにいるだけでお前は満足だったんだろ？お前の思い通りに、そこにあるだけでよかった。」

もう十分に立派なお人形扱いじゃない」

愕然とするルドヴィークに、ジョリーは悠然と微笑み掛ける。二人を静観が続けていた執事はその酷薄な笑みに、最早どちらが魔族であるか、本気で分からなくなりそうだった。

「子供は親の所有物じゃない。親子と言っても、互いに自我のある他人同士だからね。相手の自我を認められず尊重も出来なければ矢張りただの人形扱いだ。違うって、言えるの？そもそも最初から好奇心で飼いだめた愛玩動物のようなものだっただろ。今更変えたって違いは微々たるものだと思うけど」

違う、と言いたかった。言いたただけでルドヴィークは何の反論も出来ない。そういった面が確かにあったことを彼自身が認めているのだ。何も言えやせず、それが堪らなく悔しかった。

項垂れた頭を見下ろしてジョリーは、まあ人間臭くなったものだど

感慨深くなった。つい先ほど語ったことは魔族としては割りと言った感覚である。そしてその辺りの感覚の違いが人間と魔族の差なのだろうが、その差異にルドヴィークは悩んでいる。やれやれ、といった風にジョリーが苦笑するのを見たのは執事だけであった。

「まあ、お前がどう扱おうが、エヴァリーナは意思を持った一人の人間だ。だから現状を不当だと感じていて、今朝その不満が爆発した。これ当然の結果だな」

「・・・ならば、私はどうすればよかったというのだ」

「ほぼ、自分の為であつたけれど、エヴァを心配していたのも間違いないだろう？それを含め全部話せば少なくともここまで拗れることなかったと思うぞ。お前の意思で、エヴァにここに留まって欲しいと言えはよかったんだ。それで何を選ぶのか、それはあの子自身の意思だけれど。二人で納得出来るまで話せばよかった」

「・・・」

「いずれ巢立ってしまうことを強烈に意識した時、お前は手放してやる決心が付かず、かといって縛りつけて嫌われることを恐れ、ぐだぐだ選択を拒否し続けた。そのツケが今日廻ってきた」

ここで漸くルドヴィークはジョリーが、成り行きに任せ何の決断をしなかったことを怒っているのだと気づいた。

「私は・・・。そうだな、恐れていた。選ぶことで今を失うことを。あの子が居なくなることを恐れた。だから今日までずっと逃げていた。確かに当然の結果、自業自得だ」

「やっと分かった？遅いね」

「五月蠅い」

ふっと、冷え切り張り詰めていた空気が緩んだ。どのような決断でもジョリーは否定も肯定もしない代わりに、覚悟さえ伴っていれば認めてくれる。例えそれが非人道的なものであっても、覚悟さえあれば。ことさらそのことを強調するため、非情な物言いになってしまいがちだが、認めた上で受け入れる、入れないを自分の価値観に則って判断する潔さがあつた。

「まあ、年頃の女の子との付き合い方ってむつかしいからね。ちょい遅めの反抗期はなかなか長引くかも」

「矢張り反抗期なのか・・・」

「落ち込むな千七百歳児、子育ての通過点だろうが。大体反抗期の無い子の方が怖いんだぞ」

「それは実体験か？」

「嫌って程にな。・・・そういった手合いの子より遥かに素直なんだからもうちょい上手く付き合えるだろう」

「それが出来ないからこうなったんだが」

「はッ、違いない。・・・暫らく会えない間にようよう考えるんだな」

「ああ。・・・うん？会えない？」

「距離を置くには丁度よかったじゃない家出してくれて」

至って普通にいうものだから、直前感じた違和感を忘れ確かに家出されれば物理的距離が開くな、なんてうっかり頷きそうになったが頷いてはいけない言葉であった。ぽかんと間抜けな顔で家出？と首を傾げると、同じく首を傾けて家出と肯定してきたジョリーの笑顔の憎たらしいこと。

「って、ちよっと待！、！？ておおおおお・・・」

我を忘れ立ち上がりジョリーに掴みかかろうとしたルドヴィークだったが、同瞬間足の筋肉の動きに今まで無視していた痺れをもろ刺激されすっ転び悶絶する。コメディの域に近い見事な転倒に、一瞬ツッコミ掛けたが、温い視線を飛ばすに留め話を続ける。

「さあ、強制的に選ばないといけなくなったわけだが、どうする？追いかけて連れ戻す？それともこのまま黙って行かせてやる？連れ戻したら怒るだろうね今はまだ冷静に話し合えるだけの余裕は無いだろうお前にもあの子にも。だからと言って今日まで大事に大事に囲われてきたお嬢様が一人外へ出ていくのは無謀だろうね、・・・あの、聞こえてる？」

「き、ううううこおえ、」

「分かった、うん聞こえてるのね」

のたうち回りたいがそれすらも凄まじい痺れて身動きが取れず、硬直しているが一応言ってることは聞こえている。脳が遠くに置き去りにしていた思考がやっとエヴァリーナが出て行ったことを認識でき、且つそれをジョリーが誘導した、それは恐らく煮え切らないままのルドヴィークに決めさせる故であるのだろうというところまで追いついた。幾らなんでも唐突過ぎやしないか。そして乱暴過ぎる。抗議を含めて今だ痺れに歪む顔を持ち上げ睨み付けると、いつの間にか寄ってきて傍らに立つジョリーは驚くほど穏やかに言った。

「俺としては、このまま、行かせてやって欲しいなって思ってるんですけども。心配は十分理解してるけど。いつか手を離すための準備をしてきたじゃないか。一人でもやっていけるように教えてきたじゃないか。それを、信じてあげて欲しいなあ」

「……お前」

ジョリーからルドヴィークに頼むことなど滅多に無い。それが彼らの可愛いエヴァリーナの為であるのなら、同意するのもやぶさかではない。

一度、大きく息を吸い、万感を込めて吐き出す。決して平気だとは言わない。心配で気が気でない。それでも、エヴァリーナが一人で生きることを決めたのなら、自分も決意してみよう。そんな気持ちでルドヴィークはゆっくり頷いた。

同じようにジョリーも頷き返し、肩の荷が下りたとばかりに笑った。

「っと、今後の方針が決まったところで、だ」

笑みの質がころっと変わったことに気づいたルドヴィークは戦慄する。彼の中の本能が警鐘を鳴らし、今すぐここより退避しろと訴えてくる。ざっと全身から冷や汗が吹き出るのを感じる。

「な、なんだ、どうした？」

「足、どう？まだ痺れてる？」

先の会話と全く関係の無い不自然な心配に、嫌な予感というか確信に近いものを感じ、床に転がったまま後退さりしようとするも、足の痺れはまだ取れていない。思わず上がった呻きにそれを悟られてしまった。

「ちょっと待ってッ！？早まるな止めろ止まれ！！！」

「色々よね、今回のことはそれなりに思ったわけですよ、お前馬鹿やったなって。エヴァにも可哀想な事態だったし、ちょっくら反省するべきじゃね？というわけで報いてください」

「だからって何でお前が報復するんだ！！」

「俺も迷惑被ったでしょうに……。それにだ」

そこで一旦止めて、なにやら考え込む。僅かな思案でしっくりする言葉が見つかったらしい。

「一連の流れが、教育方針の違いから諍い起こすお父さんお母さんみたいでなんか凄く不快だったから」

世間一般でそれは八つ当たりという。

振り上げられるジョリーの足の軌道上に思いを馳せ、壁で只管成り行きを見守っていた執事は、主の冥福を心より祈った。

＋＋＋＋

朝のエヴァリーナの叫びで始まり、どこかそわそわと落ち着かなかった城の住人は、低く響いてきた魔王の断末魔に、『ああ、いつも通りだ』と皆安堵し、それぞれの持ち場に戻った。彼らのお嬢様が家出したという一報に騒然となるはそれから数時間ばかり後の話である。

【5】揺れる荷馬車と遅めのランチ

「あーる晴れたーひーる下がりのーちーばーへ続くーみーちー」
小さな声で歌ってはいるが狭い馬車の中だ、それなりに響くらしく視界の端で同乗者が微妙に引いていた。

移動に馬車を使う度、ジョリーがこれを歌う為エヴァリーナもいつの間にか歌詞を覚えてしまった。物悲しいフレーズだがそれがかえってシニールである。この歌を聴いた普通の人間は大抵引くが（極少数が爆笑）、こちらに對しやましい気持ちのある人間は挙動不審になるそうで、一般人と人買いの判別方法の一つなのだそうだ。：いや、ジョリーのことだから単に相手の反応を楽しんでいただけの可能性もあるが。

「ドナドナドーナードーナー子牛をのーせーてー、ドナドナドーナードーナー荷馬車がゆーれーるー」

兎も角最早条件反射の域で馬車に乗るとドナドナを歌ってしまうエヴァリーナであった。

+++++

城の転移陣をジョリーが弄り遠く東大陸に飛ばしてくれたのはつい数時間前のことである。ウイトウルス王国ヴィネス港都に続く街道付近に降り立ったエヴァリーナは断崖の向こうの青い海に歓声を上げた。彼の地にも海は在ったが、空を含め鈍色でくすんだ印象が強い。それ故に何処までも続く爽快な青に憧れに近い思いを抱いているのだから、感激も一入である。

諸国連合の海は碧色だったな、などと過去訪れた海と比較していると、街道を行く荷馬車から声が掛かった。

荷馬車を引く行商人は、崖の縁に一人で立つ女性を不信に思った。とはいえ自殺ではないかという危惧が声を掛けさせる決意をさせた

のだが、振り返ったエヴァリーナを見て大層驚き惚けた。

どこぞの貴族令嬢然とした美女が蒼い海を背に立っている。一つの絵画を思わせる完成された美しい光景に、乗り合った一同が言葉を失っている間に、エヴァリーナは距離を詰め話しかけた。

『この先の街まで行くつもりだったのだが、連れと口論になり挙げ句置いて行かれてしまった。どうしようか途方に暮れていたのだが通り掛かってくれてよかった。乗せていってはくれないだろうか』
というような内容を切々と上目使いで語り、結果街までの足を無事に確保出来た訳である。

自分の容姿を生かしてことを上手い具合に運ぶぐらいの強かさはエヴァリーナも持ち合わせている。伊達に淫魔や夢魔の侍女に囲まれて育っていなかった。

+++++

ヴィネスは、ワイトウルス王国の主要都市の一つである。内海に面している港街で、教会の総本山がある【中央】や、北大陸と定期航路で結ばれ、巡礼者や交易商で賑わっている。また観光にも力を入れていく為、そちらが目的の旅行者も多い。ワイトウルスの玄関口と言われるだけあって、街全体が明るく活気に包まれているようであった。

「ありがとうございます」

「あいよ、どういたしまして。お連れさんともう喧嘩なんかしちゃ駄目だよ」

親切な行商人に礼を言って、馬車を下ろしてもらったエヴァリーナは、周囲を見渡し感嘆のため息を吐いた。正門広場から大通りに向かって巨大な市が開かれていたのである。売り子の呼び声。値段交渉の会話。主婦同士の井戸端会議。子供たちの歓声。どこかの喧嘩と野次。通り過ぎる馬の嘶きと蹄の音。荷車の軋み。雑多な音。喧騒。賑やか。それら全ては集まった人々の存在が奏でていると思う

と、エヴァリーナは気分が高揚していくのを抑えられなかった。ここが私の新天地、一層強く心を揺らす。

頬を紅潮させ満面の笑みで、エヴァリーナは一步を踏み出した。そんな絶世の美女のどこか幼い笑顔という可愛らしいちぐはぐに周囲に居た人間は皆、ぼうっとして見惚れていた。

心機一転してこれからの生活に心躍らせていたエヴァリーナであったが、実際のところ何一つ決まっていない状態での自立である。まず衣食住を揃えることが最重要課題であり、それにはお金が必要なのである。ジョリーから『お小遣い』と少々大目の金銭を受け取っているが、いきなりそれに頼り切りになるよは良くない。それでは独り立ちとは言えない。仕事を見つけるまでは仕方が無いが、なるべく使わないように気をつけておくべきだろう。取り合えず……

「……ご飯、かな」

お腹が空いた。昼を大分過ぎた中途半端な時間であるが、朝食後のジョリーが出した軽食やお菓子を摘んだ為、今頃になって空腹を感じ始めたというわけである。朝からずっと興奮状態で、やっと気分が落ち着き始めた証拠かも知れない。

大通りを抜け人の波が減り、歩きやすくなった中で昼食をとるのに良さそうな店を探し始めた。

+++++

大通りを一本ずれた通りに食堂兼酒場、『曲がり尾猫亭』はあった。女将イルマの切り盛りする食堂は、大通りから外れているものの、味と店の雰囲気と、そしてイルマ自身の人柄で小さくともそれなりに繁盛している。亭主のパオロも手伝っているが、彼は夜の酒場を主に切り仕切っており、昼間は厨房に引っ込んでいる。そんな曲が

り尾猫亭の昼飯時の賑わいも一段落した頃である。近所の爺様がのんびりしていたり、石工連中が遅めの食事を終えたところであったり、やっと空いた店内を見渡してイルマは気を緩めた。最後の客を追い出したら一度店を閉めて、酒場の準備だ。いや、その前に自分たちの昼飯である。もう一頑張り、と気合いを入れ直した所でドアベルが、かろんかろんと柔らかい音を立る。いらっしやい、と反射で声を掛けたイルマだったが、語尾につれ小さく消え入ってしまった。ぽかんと間抜けに口を開き、入ってきたお客に目を奪われた。小さな食堂には不釣り合いな、寧ろ場違いな、というかもうこんな場所であることをお詫びしたくなるような麗人がそこに立っていた。淡く輝く長い金髪と蒼穹を詰め込んだ瞳にまず目がいく。卵型の輪郭、すべらかな白い肌に乗った眉や目や鼻や唇がこれ以上ない采配で並び、文句なしの造形美を完成させている。こんにちは、と愛らしい薄紅の唇から発せられたのは、これまた鈴を転がすような声だった。

「まだランチってしてますか？」

そっと、控えめに尋ねられたことで、やっとイルマは我に返った。

「：え、ええ、はい。はいはい、どうぞ好きなところに掛けて下さい」

それを聞いてほっとしたように小さく笑うと、女性はカウンターの端の席に着いた。知らずに女性の動作を追っているイルマの目の端で、他のお客も見惚れているのが映る。さあ、果たしてあんな上品なお嬢さんの口にこの店の料理が合うのだろうか。覚えた一抹の不安を振り払い、イルマは厨房の夫へ声を掛けた。

【6】新生活の為の就職活動の前の準備期間中に行き成り雇用

「ごちそうさまでした」

綺麗に皿を空にしたエヴァリーナは、両の手を合わせペコとお辞儀をした。それを見たイルマは食後の珈琲を出してやりながら不思議そうに首を傾げた。

「食べる前もそれやってたね。お祈りか何かかい？」

「小父の故郷の風習らしいです。一緒に食事を取るうちに私も癖になっちゃって」

ふと気付いてイルマにも小さくお辞儀をし、美味しかったと伝えた。からからとイルマは笑う。

「口に合ったみたいだね、良かった良かった！うちみたいなちっさい食堂のランチがアンタみたいないところのお嬢様の口に合うかどうか心配だったんだ」

「そんなことないです、とっても美味しかったです。ソースのちょっと変わった風味が絶妙でした」

「ああ、気付いてくれたかい？虹百草を少し加えてあってね、うちの店オリジナルソースなんだよ」

初めは圧倒的美貌に気圧されていたものの、存外エヴァリーナは人懐っこく話しやすかった。イルマの気さくな人柄も手伝い、二人はカウンター越しに暫く取り留めのない世間話に花咲せた。

+++++

「――ところでお嬢ちゃんは旅行でこの街まで来たのかい？」

「あら、やっぱり余所から来たって分かってしまいますか」

「ここは大きい街だけど、こんだけの別嬪が居たら知らないなんてないだろうさ」

まず周囲が放って置かないだろう。何気なくイルマが店内を見回す

と、お客が皆エヴァリーナを凝視していた（その中の一人に、厨房の戸口から視線を向けている夫の姿を見つけた為、半眼で睨んでいた）。エヴァリーナ自身は慣れているのか一向に気にせず、珈琲に口を付けていた。

「：：実はですね、私：」

こそつと内緒話をするみたいに声を潜めたので、思わずイルマも身を乗りだし耳を寄せた。それにエヴァリーナは悪戯っ子のような笑みを浮かべ、呟いた。

「家出したんです」

「はあ、家出、って！？ええっ！！？」

素っ頓狂な声を上げて驚くイルマを楽しげに見つめ、エヴァリーナはこころ笑っている。

「家出って、そりゃまたどうして」

「19にもなって自活していないのは如何なものかと思ひまして」

「いや、自活って：：。女の子だろう？好きな人が出来るまで親元に居たって可笑いことじゃないさ」

「実家、人里から離れてますし：」

出会いはないと言いたいらしいが、それならそれで縁談という方法があるのではないか。言葉や仕草の端々に滲む気品は、どうあっても良家の子女だ。ひょっとしたら貴族なのかもしれない。なら寧ろ縁談など山のように舞い込むのではないだろうか。

「：でも、家出って、家の人が心配してるんじゃない？自分で何かするって決意するのは良いことだと思うけど、それで世話になってる周りの連中に迷惑掛けちゃいけないよ」

「ええ、そうですね」

そもそもそんな身分の女性が自活がどうのと気にしているのも妙な話であるが。しかし真白い綺麗な手は、今までが誰かにかしずかれる生活を送って来たことを物語っている。女が一人伝手もなくやっという程世間様は甘くはない。ましてお嬢様がどう生きていこうと言うのだろう。

でも、とイルマは思う。僅かながら話した印象ではあるが、エヴァリーナは浅はかではない。ちゃんものを考えれる頭の持ち主が、自身の行動の無謀さに気付かないこともないだろう。

「家を出なきゃいけない、切羽詰まった事情があったのかい？」

どこまで触れていいのやら、分からなかったが、元来世話好きな性格である。お節介を承知で訪ねた。

＋＋＋＋

「切羽詰った事情と言いますか・・・」

赤の他人にどこまで答えていいのやら、一瞬エヴァリーナは考える。

「うっかりすると一生外に出してもらえなくなりそうだったので、先手打って出てきました」

「「「「・・・は？」」「」「」」

結局大した躊躇も無く、端的事情をさっくり言った。イルマを始め、聞き耳を立てていた客全員がぼかんと間抜けに顎を落とした。

「何かと過保護な傾向がありましたけど。それがあんまりにも行き過ぎて最近軟禁気味で」

「なっ、軟禁!？」

行き成り出た物騒な言葉に、イルマは泡を食った。

「え、え、でも、お偉いさんの娘さんなら多少の不自由くらいするんじゃない・・・」

「私は元々関わりの無い行き倒れの子供です。ずっと家に居られるとは思ってませんでした。いつか独り立ちして出て行くつもりで、周囲も私の将来は私の意志に委ねてくれていました。・・・でも、なんだか急に父と会話が成り立たなくなってしまうって、最近はずっとすれ違っていました」

見事に訳あり。あくまで淡々とした態度であったが、伏して落とした視線から漂う憂いに、どこぞの小説の様な愛憎劇を想像しイルマはさっと青ざめる。

ちなみにエヴァリーナは全く持って嘘は言っていない。語らない部分を相手の想像に任せているだけである。

「育った家を出ることに未練が無いとは言いません。勝手なことをして父に申し訳なくも思っています。でも、このままだと父は私を一人の人間として認めてくれないと思いました」
だから、黙って出てきました。

言い切ったエヴァリーナの表情に陰りは無い。本心からの言葉を吐き出したからである。けれど本当はルドヴィークに聞いてもらいたかった思いだ。それだけが本の少し、胸を刺す。

「・・・決意は立派だけどね、お嬢ちゃん。それで、これからどうするつもりだい？」

「これからこの街で生活していく為の準備を始めようかと思います」
「食うにも何にも先立つ物があるだろう」

「出掛けに背中を押してくれた方が居まして、『新生活スタートの饞別』とか渡されました。取り合えず新住居と就職先が決まるまで繋げます」

胸を張って宣言された内容に、頷きかけいやいやとイルマは頭を抱えた。行き当たりの食堂でなんてことを喋るのだろうかこのお嬢様。気骨があるのは認めるが、どうにもこうにもあまりに無邪気で危うい面が見えた。

「世間知らずの娘さんが不慣れな街でのこのこ歩いてたら悪党には鴨が葱背負って歩いてるように見えるだろうね」

「ええ、小父にも『君はまず誰ぞにかどわされ何処ぞに売り飛ばされる心配をしてなさいね』と、重々言い含められました」

そこまで言うなら無謀な独り立ち止めろ、と食堂内全員の総意であった。

けれども、そういった危険性も知ったうえでもう決意してしまっているのなら、止めるだけ無駄なのだろう。ふと、彼女の小父とやらも同じ事を思ったのかもという気がした。なら好きにさせようと決めたエヴァリーナの身内と、だから心配になっている赤の他人の自

分。成り行きで事情を聞いたがもう気に掛けるなというほうが無理である。

イルマは自身の丸くなった顎を撫で回し、ちらりと夫を振り返った。パオロもなんとなしにこっちを見ていて、夫婦揃って同じ考えをしたことを察する。そして夫婦揃ってのお人好し加減に、お互い苦笑いを浮かべた。

「お嬢ちゃん」

飲み干したカップの淵を指でなぞっていたエヴァリーナは顔を上げた。くると円く大きな蒼い瞳と、やや弛んだ瞼の奥の橙の瞳がひたと見詰め合う。

「うちで住み込みで働かないかい？」

【幕間】弄りとは愛情が不可欠な代物（前書き）

「主様ー」

「イトカか。どうした？」

「ここへ来てお話しするように言い付かりました」

「そうか。・・・ん？今回お前は出てこない筈だな」

「はい。今回どころかあと数話は出番が先ですねえ、下手したら十数話先？」

「じゃあ、何故居る」

「なんでも女の子がお嬢様の他誰も出てなくて野郎ばっかってことに気づいちゃったらしーです」

「ならさっさと出せばいいだろうに」

「話の都合上やっぱり数話先になっちゃうそうで、やってられっかちきしうってなったそうです」

「・・・そうか」

「全くもーお嬢様という空前絶後の超絶スペシャル美人がいるのに贅沢なこといっちゃってますよね。あっそうだ、ジョリー様は？ジョリー様何処ですか？」

「『裏方のお仕事してきます』とか言って出ていった」

「ああんもうジョリー様あどっか行くなら言って下さらないとお見送りといってらっしゃいのキスが出来ないじゃないですかあー・・・、本当つれないお方なんだからあ」

「（そうか、イトカが来るから居なくなったんだなあいつは）」

「仕方ないからもういいです。本文お楽しみくださあい」

【幕間】弄りとは愛情が不可欠な代物

ゴンツガラガンツカラカラカラカラ……

扉を開くと同時に落ちてきたやや大きな金盥がルドヴィークの脳天を直撃し、喧しい音を立てて廊下に転がっていく。壁にぶつかって金盥の動きが止まると、動きを止めていたルドヴィークの身体が揺れ緩慢な動作で倒れた。金盥はダメージがあったらしい（主に心の方に）。

自室に辿り着いたところで力尽きた（主に心の方が）ルドヴィークに、執事ツイリルは黙祷を捧げた。

＋＋＋＋

こここのところ家臣によるルドヴィークへの風当たりが厳しい。止まっていると一言申し上げたいと猛抗議を受ける。歩いていると囁かだが悪質な嫌がらせをされ、聞こえるように陰口を叩かれる始末だった。

全てはエヴァリーナにみすみす出て行かれてしまったルドヴィークに原因があるため、ツイリルを含む良識派の家臣からも同情はされていない。

「お疲れ様です」

「……ああ」

ぐったりとソファの背にもたれてたルドヴィークに普段の覇気は無い。この情けない姿が家臣達を更に増長させているのだろう。同情はしていないが、それとなく諫めておく必要がある。ツイリルは現状に不満を持っている他の家臣達を思い浮かべた。

＋＋＋＋

魔狼の一族は、正々堂々直談判という形で連日抗議を続けていた。狼族は概ねエヴァリーナに好意的なのだが、それというのでも彼らの中で英雄視されている老女狼がエヴァリーナの世話役を勤め、自らの子にするように愛を注いだことが大きい。特に彼女の直系はエヴァリーナを一族の末子扱いし、大切にしている。今すぐ謝ってこい連れて帰ってこいと日増しに高くなる声は、そのままエヴァリーナへの強い想いだった。：お陰でルドヴィークもあまり言い返せない。次いで反感を隠さないのは城内の侍女、妖魔族達である。身の回りの細々した雑務は全て彼女らの仕事で、当然エヴァリーナの世話も彼女らがこなしていた。間近で見守り続けていれば情も湧くだろう。加えて容姿も美しい。私達のお嬢様と、皆で愛で大事に大事にしていた訳である。そのお嬢様が、大事なお嬢様が、出て行ってしまった。ルドヴィークのせいで。怒りの矛先は、言わずもがな。彼女らが何をしたのかは敢えて言及しないが、やんわりと止めてやってとジョリーからストップが掛かったと言っておこう。女を怒らせてはいけないのである。

さて、ジョリーであるが、フォローに回っているかと思えばそうでもない。先ほどの降ってくる盥はジョリーが仕掛けたトラップだった。城のあちこちにルドヴィークの魔力に反応する転移術式を施し、近づくとも作動するような仕掛けを飽きもせず作り上げたのであった。これがまた嫌な風に芸が細かい。魔王をもってしても位置が判別出来ず、毎回微妙に移動し、発動はランダム。警戒がふと弛んだ瞬間を狙ったとは思えないタイミングで必ず命中する。『200落ちたら終わるから』と事前にトラップ宣言されたのにも関わらず、一度も避けられたことがないとあってルドヴィークの自尊心は幾ばくか傷つけられたようだった。（ちなみに現在カウント97盥。やつと半分に差し掛かった）

と、まあ。こんな具合である。皆が皆取り敢えず『自分も何かしておくか』と仕掛けるものだから、ルドヴィークは怒声に悩み、嫌みに傷つき、トラップに神経を削られる日々を続けていた。魔王が家臣の横暴を許しているのか、いや否だがそれもこれもエヴァリーナが皆に慕われている証なので、ルドヴィークも耐えていたのである。

「：：金盥とは、結構衝撃があるものなのだな」

首を撫でながらぼつりと呟いたルドヴィーク。痛くはない、と言うか魔王の耐久性では衝撃すら感じないはずである。それが堪えるとはよっぽど疲れているのではないだろうか。

決して家臣達から忌み嫌われている訳ではない筈だ。寧ろ畏敬の念は皆持っているだろう。かといって普段の扱いが割りとぞんざいなのは、矢張り人徳なのかもしれない。

ツイリルは在りし日の主に思いを馳せる。昔のもっと、こう、威厳に溢れ魔王らしい風格があった頃を。現状からは想像しにくいが、これでもルドヴィークは歴代魔王の中では好戦的で野心家であり、各地の魔物を力によって支配し、人間世界にも頻繁に手を出していた。900年ぐらい前までは。

丸くなってしまったと言われる今のルドヴィークに意識を戻した。金盥の衝撃が抜けないのか頭を抱えて俯いている。ジョリーに出会ってそれからずーっと鼻っ柱をへし折られ続けたお陰で何処か達観してしまい野心は也を潜めた。エヴァリーナを育て始めてからはさらに穏やかになってしまった。魔王として、その変化が良いかは分からないが、決して悪く無いと思っている。そしてそんなツイリルも皆も魔族としては奇妙なのだろう。

だが、悪くは無い。

「主様、大変かとは存じます。けれど皆貴方を嫌っている訳ではないと、覚えておいて頂きたいのです。ただ、お嬢様の身を案じて不安になっているのです」

「分かっている。・・・だがら咎めはしていないだろう」

「ええ、そうですね。今回の件に関しましては主様の自業自得であ

りますから」

「おい」

「ですが、矢張り何も咎めないというのも可笑しなことではないでしょう。私どもは貴方の家臣、それが最近あまりにも身の程を弁えない」

「・・・こんな主に何を弁えるのだと思うがな」

「魔王ともあろう方が、そう自身を卑下なさいますな」

「すまん。どうにも・・・。お前からそれとなく言っておいてくれ。今の私が言っても反感しか買わんだろう」

「はい。・・・しかし折を見て主様も」

「ああ、流石にいつまでも此の儘では示しがつかないからな」

「ようやく、ルドヴィークの顔に統治者としての威厳が戻ってきて、ツイリルは安堵した。」

「ところでツイリルよ」

「はい」

「大広間の見えない大量のトラバサミ群はお前か」
「問いではなく確認である。」

「いやいや、年甲斐も無く張り切ってしましましてな。はっはっはっ」

「笑い事じゃないだろう」

「しかし流石で御座いますな、色々と小細工をしたつもりでありましたがこうも簡単に見つかってしまおうとは」

「腐っても魔王だからな」

「おや、腐っても等と言っではいけません。主様はご自身を低く評価する癖がついてしまったようですな」

「すまん。・・・あ、いや、だがら話の論点が違う」

「こうして執事にすら弄られ今日もまたルドヴィークの一日は終わって行くのであった。」

【7】事態とは知覚出来ない処で進んでいるようだ

ヴィネス港都下水道

半ば水に浸かるように設置された魔導機が、ぱきんと音を立てた。

＋＋＋＋

「先生、先生こっちです！ いやーお待たせしました」

約束の時間を少し過ぎていた。そのことにクレメンテは一瞬顔をしかめ、歩み寄ってくる小太りな男を見たが、相手はまるで気付かず側までやって来て改めて挨拶をした。

「いや申し訳ない、出掛けにちよいと女房に疑われましてな。あんな浮気してんじゃないの！ ってなもんですよ、いや参りました。私にそんな甲斐性があつたらとっとと出て行って第二の人生とやらを始めてますよわはははは」

豪快に腹を揺らして笑う。何だっというが往来で注目を集めるようなことは止めて欲しかった。しかし、聞いてもいないのによく喋る男である。

クレメンテとしてはさっさと仕事の話を済ませ研究に戻りたいのだが、如何せん相手は無駄話が好きらしい。かと言って邪険に扱えば飯の種がなくなりかねず、結局無意味な会話に付き合う羽目になった。

＋＋＋＋

クレメンテ・ルッソ。元王国魔術士で、一応国に仕えていた身であるが、今は魔導技師として生活している。

術式を組み込み魔素を動力とする魔導機は人々の生活に少なからず

影響を与えている。ランプ、ストーブのような小さなものから、下水道等大きなシステムまでその用途は多岐に渡っている。そして魔導機を扱う専門職を魔導技師と呼んだ。

クレメンテは一ヶ月程前に、ヴィネスに移り技師を始めた。それまでは街に個人経営の技師は居らず、何か問題が起こる度、領主に伺いを立てお抱えの技師を派遣して貰わねばならなくて、いちいち面倒であり、その手間と時間が大幅に減ると周囲からは概ね歓迎されての開業となった。

今日も水路の調整装置の点検の依頼で自治会長と打ち合わせの筈であつたのだが。

「いやいやしかし丁度昼時になりましたなあー、どうですかこれから腹ごしらえに行きませんか？実はですね、旨い飯出す食堂があるんですがね、知りませんか曲がり尾猫亭って。いやそこに最近超ド級の美人ウエイトレスが雇われてね、毎日毎日それ目当ての客で超満員なんですよ。いやいやいやや私どうにも美人には滅法弱くてついつい足繁く通ってます。いや前から鼻屑にしてた食堂なんですがね。ささ、行きましょ行きましょ腹が減っている話も弾みませんさあさあ！！」

とまあ、こんな具合に口を挟む隙もなく曲がり尾猫亭へ美人ウエイトレスを見に……ではなく、昼食をとりに行くことが決定していた。クレメンテが眉間の皺を深くしていたのも何のその、ちゃっかり自分の意見を通した辺り、この男案外やり手なのかもしれない。

+++++

道すがらずっと一方的に喋る自治会長と、それに辟易しながら着いてきたクレメンテは、曲がり尾猫亭が見えた所で立ち止まった。何だか店の中が騒がしい。

「あんたたちいい加減にしなッ!!」

凄まじい勢いで開け放たれた入り口から、男達が叩き出され通りに無様に転がり出てきた。次いで出てきた女将イルマの、魔物も裸足で逃げ出すのではという形相と迫力に、叩き出された男達と騒ぎに集まってきた野次馬とクレメンテ達は、じりと後退りする。

「男が雁首揃えて鼻の下伸ばしてんじゃないよみつとも無い!! 食い終わったなら出て行きな、次がつかえて営業妨害したらありやしないよ!」

物凄い剣幕で怒鳴り散らすイルマに言われている男達はたじたじだ。不満げにこっちは客だぞ、などと言った者も居たが威勢はまるで無い。それ所か聞きとがめたイルマにじろりと睨まれて竦みあがっている始末だ。

「客っていうのはお金を落としていく奴のことだろ。珈琲一杯で何時間も居座ってあまつさえ仕事に遅れるような奴はうちじゃ客と呼ばない。単なる厄介者さ、分かったらとっとと仕事に戻りな!!」

「あの、イルマさん。もうその辺りで・・・」

突如、激昂するイルマの背後から、鈴を転がすような声で制止が掛かった。その場全員の注目が集まる先、一人のウエイトレスが困ったように微笑み立っていた。その美しい立ち姿に皆目を奪われる。あまり他人の容姿に頓着しない性質であるクレメンテですら、思わずはっとなる美人であった。

「そうは言ってもねえ、あんただって不愉快だろう?」

イルマは先ほどの様子とは打って変わり、柔らかい応対をする。ウエイトレス、エヴァリーナは小さく首を振ってみせる。

「いいえ、気にしてませんから。ほら、イルマさん、そんな怖い顔して入り口に立ってたら次のお客さんが入っていいのか困ってしまいますよ。ほらほら」

そう言ってイルマの背中をやりわり押して店の中に促した。イルマはまだ言い足りないといった風に叩き出した男達を見ていたが、エヴァリーナに従い戻っていった。それに続こうとしたエヴァリーナ

は、不意に振り返って、男達に微笑みかけた。

「・・・お仕事頑張って下さいね。それでは失礼します」

そして、今度こそ店に入っていた。かろんとドアベルが鳴って扉が閉まったことで、漸く皆動き出すことが出来た。微笑みかけられた男達はだらしのない顔を隠そうともせず、仲間内で盛り上がりながら去っていった。仕事に戻るのだろう。

「・・・」

「さ、一件落着いたようですし入りましょう入りましょう」

何事も無かったように自治会長がさくさくと進んで曲がり尾猫亭に入っていく。本当に図太い男だと中は呆れながらクレメンテも扉を潜った。

＋＋＋＋

ヴィネス港都下水道

半ば水に浸かるように設置された魔導機が、ぱきつと音を立てた。

【8】母性愛最強伝説

「あいよ、サンドイッチあがったよ！」

「はい。：：お待たせしました、どうぞ」

エプロン紐の白い蝶々結びが揺れる背中を見て、イルマは、ほうと息を吐いた。呆れや疲れからではなく感心からの行為だった。

エヴァリーナを雇って既に一週間経っている。初めこそ場の勢いで雇ってしまい、これからどうなるかと思っていた。言い出したのは自分だから、仕方ないのだけれど、果たしてお嬢様が労働に堪えられるのか、イルマには不安であった。一人前の仕事が出来るようになる面倒を、と考えてはいたのだが、一体全体どれ位の時間が掛かるのだろう、とも。

しかし、そんな不安は単なる杞憂として消えることとなる。

「イルマさん、日替わり定食2つとサンドイッチ、食後に珈琲で」

「はいはい。あと二番の豆スープあがったよ」

「はい」

エヴァリーナの物覚えは良かった。最初こそ戸惑うこともあったが、慣れてしまふとくるくる手際よく動き、仕事をこなしていた。水仕事ですら厭わず、その真白い手が荒れてしまうと逆にイルマ達が氣を使った程であった。接客に関しても、極自然に頭を下げ、常に笑顔をやささない。絡んで来る質の悪いお客をやりわりかわす姿に思わず拍手を送りそうになった。

曰わく、家出を焚き付けだ張本人の小父が色々と経験させてくれたそうだ。義父が何もなくていいと言うのに対し、こっそり家事の手伝いをさせたり、出掛けついでに1日だけ働かせてみたり、内職を体験させてみたり。出来ることは多い方が選択肢は広がるって、つまり職業訓練をさせられていたのだった。

「お待たせしました」

と言うわけで、思いがけず当たり人材を雇い万々歳であったのだが、

同時に困った事態も発生することとなった。

「お待たせしました」

「ありがとうエヴァちゃん」

運ばれてきた料理を気もそぞろに受け取り、鍛冶屋の親父は赤ら顔をだらしなく緩めエヴァリーナに笑いかける。これがイルマ相手なら出来上がりが遅いだのなんだの文句の一つでも出てくるだろうに、愛想と下心を振り撒いて大層気持ち悪い。

雇って一週間、曲がり尾猫亭はエヴァリーナ目当ての客で連日満員状態になっていた。店内をエヴァリーナがくるくる行き来する度に、客の目もその姿を追いくるくる動いている。美人の集客効果を舐めていた。

独り身のしがない石工連中の前で雇うと言ってしまった為か、噂はあっという間に広まってこの有り様だ。その彼らは今日も食堂一角を占領し、エヴァリーナに熱い視線を送っていた。

そういう客を牽制し、時には叱り飛ばし店から叩き出すことをイルマは日々繰り返し返している。どうにも浮かれた男共は腹が立つのだが、純粋にエヴァリーナを心配している気持ち強い。

一人息子を戦争で亡くし、それにめげず夫婦二人で支えあい明るく生きてきた。それでも矢張り寂しい気持ちがあったのだろう。イルマはエヴァリーナをまるで新しくできた娘のように思っている。娘が男の無遠慮な視線に晒され続ければどんな母親だって気が気ではないだろう。

当の本人はまるで視線を気にしていない。人目を引く容姿をしている自覚もあるので振舞いも無頓着ではないのが唯一の救いであった。

「イルマ」

厨房から顔を出したパオロが声を掛けてきた。イルマがエヴァリーナを眺めていたことに気づくと、巖のような大きな体割りに愛嬌のある目を細め表情を和らげた。

「・・・いい子だ」

「ええ、本当に」

夫婦の間に一瞬和やかな空気が流れた。昼時の忙しい時間であったが、こうした間が最近度々あった。誰のお陰か言うまでもない。と、二人の視線の先でお客がエヴァリーナの尻を触ろうとしていて、瞬時にイルマの形相が変わる。和み空間は木っ端微塵に碎かれた。肩を怒らせて客に駆け寄っていく妻の後姿にエールを送り、パオロは自分の仕事場に引っ込む。

イルマの怒声と客の悲鳴がその背を追い掛けて行った。

【9】朴念仁魔術師の仕事と思考

ヴィネス港都下水道

半ば水に浸かるように設置された魔導機が、メリツと音を立てた。

＋＋＋＋

無駄話を交えた（といっても相手が一方的に喋るに任せていたのだ）が、打ち合わせは、クレメンテの思った以上にスムーズに進んだ。ヴィネスの水は魔導機によって管理されている。街の北側、領主の館の背後の断崖から流れ落ちる水を、地上と地下に巡る水路を通し各所に行き渡らせ、人々の生活に賄っていた。生活用水と汚水を分け、海水の侵食を防ぐ。循環する水流・水量を一定に保つ等、魔導機の役目は多岐に渡った。

今回のクレメンテへの依頼というのは、その魔導機の点検及び修正。本来役所の仕事であるが、現在魔導機を扱える人間は領主の顧問魔術師のみ。そうすると必然的に請け負う業務も多くなっていくため、非常に多忙になり、優先度の低そうな案件は後回しになってしまうのである。水路調整の魔導機もしかり、問題なく稼動しているのであれば放って置いて構わないだろうという意識が役人側にあった。かといって日々の生活に密接している分、何かあっては遅い。こういったことは住民側の方が敏感で、ちまちま催促を続けていたところに丁度クレメンテが開業した。これはチャンスだと、北部区域の自治会長ドナートは、なんと領主に了承を取り、申請すれば行政機関管轄の魔導機をクレメンテが触れることが出来る権限をもぎ取ってきたのである。

＋＋＋＋

「いやゝいやゝ相変わらずこの飯は美味しいですなゝ、いさ正に毎日食べても飽きないってヤツですよもう本当」

「なんだい急に。大体あんたが毎日来るようになったのはエヴァちゃんがうちに働き出した後じゃないか。下心が見え見えなんだよあんたも他の連中も!!」

「いやそんなこと、あるかもしれませんが、というか確かにそうですが飯が美味しいのは本当のことですよ、そうですね先生?いくら美人が働いてても飯が不味きや食堂は流行りっこない。つまり相乗効果ってことですよ看板娘役盗られたからって気にすることないない、女将さんと美味しい飯が無くっちゃあ曲がり尾猫亭は閑古鳥鳴いてますって」

「持ち上げたってなんも出ないよ!ほら、食い終わったんならさっさと帰って仕事しなよ」

「おおっと、もうこんな時間か、いやいや仕事の話と美味しい飯と美人二人に気を取られていると時間ってものはあっという間ですな」

お世辞と言えど褒められて悪い気はしない様で、追い立てるイルマの言葉に険は無い。ドナートの話術に素直に感心した。無愛想なクレメンテには到底真似出来ない芸当だ。

イルマとドナートの、そんなやり取りを尻目にクレメンテは渡された資料に目を通していた。北区画外れの地下に設置された魔導機の術式の図案を持参した藁半紙に書き込みながら、その構成、機能の頭に入れていく。途中術式の構成を弄ってみたり、空白部に別の展開式を描いたり、思い着くまま紙を黒く埋めていく。カリカリカリカリカリカリカリカリ、絶えぬ筆の音が食堂の喧騒に紛れていく。ドナートは支払いを済ませて、自身の仕事に戻ったらしかったが術式へ思考を集中していたクレメンテは気付かないで没頭していった。

鼻腔を刺激した香りに、集中が途切れた。僅かに視線を上げると湯気の立つ珈琲が資料を広げた卓の邪魔にならない位置に置かれたのが目に入った。更に顔を上げると蒼穹の瞳が見つめ返してきた。どうぞ、と微笑んで珈琲を勧めてくる。

「・・・頼んでいない」

「サービスです。と言っても、自治会長さんがセット分飲まずに出られたので、その一杯なんですけど」

本の少し茶目っ気のある仕草で首を傾げ、卓の隅に追いやられていた空のカップを下げていった。はて、自分はいつ一杯目を空にしたのか、そもそも出された記憶すらない。思考に没頭して周囲が見えなくなるのが常であるが、流石にクレメンテもぎょっとして食堂内を見渡す。客はすでに自分ただ一人となっており、イルマとエヴァリーナが片付けに取り掛かっていたのである。

「すまない、今すぐ出て行く」

「ああ、いいのいいんだよ。自治会長から言われてるからね。仕事だろ？ 続けたらいい」

「しかし迷惑だろう」

「なあに、真面目に仕事してる奴追い出したりしないよ。他の連中は皆エヴァちゃん目当てで、食い終わってもでれでれ鼻の下伸ばして帰ろうとしないからさ。あまつさえ意味も無くエヴァちゃん呼びつけて、邪魔で仕方なくて叩き出したんだ。営業はもう終わったけど、大人しくしてる客なら放って置いて構やしない。切りのいいところまでやっちゃったらどうだい」

「いや、自宅でも続けられるから」

「そうかい？ ならその一杯だけでも空けていきな。ずーっと体勢変わらないから心配だったんだ、休憩しておいき」

そこまで言われてしまうとクレメンテも断らず席に着く。丁度飲み頃になった珈琲に口を付け、一息入れた。書き物をしているとどうにも前傾姿勢になる。固まった肩を解しながら、何の気なしに卓を拭いてまわるエヴァリーナの後姿を眺めた。

白いブラウスと濃紺のロングスカートに身を包み髪を上げた、飲食店で働くに相応しいその姿は飾り気というものが一切無い。それが却って清楚な印象を与え、目を引くのだろうか。地がいいと何を添えても引き立て役と化すらしい。

確かにエヴァリーナは『超下級の美人ウエイトレス』であった。しかしそれだけである。少なくともクレメンテはそれ以上の感慨は沸いてこなかった。世の中には上辺だけ綺麗に取り繕っているものがある。そんなものには研究を続けたいと思っていた。

ぼんやり物思いに耽っていると、ふいにエヴァリーナが振り返った。視線に気づいたのだろうか、やんわり微笑んだだけでまた仕事に戻っていった。クレメンテの方も何事もなかったかのように最後の一口を飲み干して、手元の資料を片付け始めた。続きは矢張り持ち帰ってするべきだろう。

揃えた藁半紙が一枚クレメンテの手から滑り床へひらりと落ちた。

それを拾ってエヴァリーナが手渡ししてくれた。

「お帰りですか？」

「ああ」

「ありがとうございます。またどうぞお越してください」

短いやり取りの中でも笑顔を崩さず見送る。石工達を始め様々なお客を魅了するそれにも矢張りクレメンテは何も感じず、踵を返して店を出た。ただ、扉を閉める前に、

「左の式では負荷が掛かりすぎて、やがて自壊してしまいますよ」と空耳と間違うほど小さく聞こえた言葉は、既に次の術式考案に頭が一杯であったのと、極普通に言われたため何の疑問も抱かず、記憶の隅に留められたのだった。

＋＋＋＋

ヴェネス港都下水道

半ば水に浸かるように設置された魔導機が、メキツと音を立てた。

【10】労働の結果の痛みは生きている証と誇り

デッ、ト。テヲミル

「大分荒れちまったねえ」

エヴァリーナが顔を上げると、イルマが何だか申し訳なそうに笑っていた。もう一度視線を落とすと自分の両手が目に入った。ついこの間まで透き通るような白さだったのが僅かにくすみ、カサカサと荒れた肌特有の質感に変わっていた。水仕事は当然こうなる。

「今までで一番荒れてますね」

手荒れどころか逆剥け一つで侍女達は大騒ぎし、寄ってたかって薬を塗ったり、包帯で被ったり、治癒術掛けようとしたり（これは止められていた）、悪化する間もなかった。お陰で何か自分の手が物珍しい。

「痛いだろう？」

そう言ってイルマはエヴァリーナの手を包むようにさすった。日々の生活で荒れて固くなったその手は、いつかエヴァリーナを慈しんだ婆やの皺だらけの手の優しさと重なる。あるいは記憶に残っていない母がいれば、こういう風であったのかもしれない。

「多少は：。でも大丈夫ですよ」

重ねられた手を握り返す。それからエヴァリーナはちょっと微笑んで見せた。

「これからもっと頑張って、それで苦勞して、この手もきつとその分汚れたり、傷ついたりするんでしょうね。へこたれるにはまだまだ早いですよ」

「そうだねえ……。でも、なんか痛々しいよ。ほらあたしの手と大違いだ！なあって、おばさんの手と若い娘さんの手を比べちゃ当然か」

冗談めかしてイルマも笑った。つかの間、窓から差し込む午後の暖かい日差しと、二人の笑い声が相俟って和やかな空気が作り出され

た。

「私、イルマさんの手、好きです」

ぽつりと弦きが零れる。

「手はその人の、人となり分かりやすく現れるって。・・イルマさんの手は働き者で優しい人の手です。だから私もこうなりたいなって、目標です」

「え、あ。あはは、いやだよ、よしとくれ何だか照れちまうねえ、もう！こんなおばさん目標なんて、あんたならもったいい女目指しな！」

どうにも照れくさくなったのか、イルマはパタパタと厨房の方に駆けて行った。掃除の続きもしなければならぬので、エヴァリーナも腰を上げる。休憩は終わりだ。もう一度、自分の手を見下ろす。

陶器の様な、と評すことは出来なくなってしまったが、これはこれでいいのだ。苦勞知らずに見えて、エヴァリーナとて様々な経験を経てここにいる。ただ周囲の並々ならぬ情熱を持ってその足跡が残らなかったことを思えば、苦勞の結果が例え痛みであってもこうやって自分に残っているのは誇らしい。

うん、と一つ自分に頷いてエヴァリーナは仕事へと戻るのであった。

【11】出勤途中に行き当たりばったりのついで

何気なく耳にした一言だった。無性に気になって思いつきで描き出した術式を確認してみると、成る程確かにこれでは魔素の流れが強すぎて崩れてしまうだろうという構成になっていた。そこからそれを手直しすることに没頭、結局徹夜で試行錯誤の結果制御術式を完成させるまで、ころっと忘れていた。

僅かに感じた引っ掛かりを思い出し、疑問に思ったのは、達成感と徹夜明けでナチュラルハイに陥った自分を落ち着けるため、ひとまず寝ようとベッドに倒れこんだ直後だった。

「・・・何故一般人ウエイトレスが高等術式を理解出来た・・・？
・・・・・・・・」

呟くと二秒で夢の世界に旅立ってしまったが、クレメンテの疑問はしっかりと脳に刻み込まれていた。

+++++

ヴィネス港都地下水道

半ば水に浸かるように設置された魔導機が、ミシミシと音を立てた。

+++++

ドナートとの打ち合わせから二日、クレメンテは地下水道へ下りる為、北部区域の水路に掛かる橋へと向かっていた。橋の袂に地下へ通じる通路があるのだ。

普段は鍵付きの鉄柵で封鎖されている場所なので、先にドナートの自宅まで鍵を受け取りに行ったのだが、これがまた喋ること喋ること。途中奥方が背中を蹴っ飛ばして止めなければまだ続いていただろう。恐ろしい。

子供らが脇をわらわらと追い抜いて行くのを何の気無しに目で追う。バランスの悪そうな小さな体が跳ね回るように駆ける姿を見て、よくあれで転ばないのだなと不思議に思っていると、最後尾の子供が石に躓いてあっさり転んだ。

目の前のクレメンテが動くより先、他の通行人が寄ってくるより先、転んだ子供が泣き出すより先、女性が進み出て子供を助け起こした。件のウエイトレス、エヴァリーナであった。

泣く寸前の中途半端に歪めた子供の顔が、自分を起こした相手を見てぽかんと間の抜けたものに変わった。そして赤面する。美貌とは大人子供関係無しに作用するようである。

取り出したハンカチで顔を拭い、服を払ってやって、最後にエヴァリーナは子供の頭を撫でてやっていた。子供は照れくさかったのかもごもごと小さな礼を言い、他の子らの元へ掛けて行った。それをにこにこしながら見送るエヴァリーナがふとクレメンテの視線に気づき、僅かに目を瞠った。会釈する。

「こんにちは」

「・・・どうも」

明るく挨拶をされても、生粋の朴念仁であるクレメンテの対応は無愛想なものになってしまう。

「いい天気ですね、お散歩ですか？」

「いや、仕事に向かう所だ」

「・・・曲り尾猫亭にいらっしゃったお客さんですよ？自治会長さんと話していた仕事ですか？」

「ああ。・・・覚えていたのか」

「ええ、二日前のことです。それに印象に残りましたもの、覚えてますよ」

はて、何か特異なことをしていたかと首を捻ると、自治会長と話していた、喧騒を物ともせず書き物をしていた、他の客が追い出されても気づかない、魔術師だった等、印象に残ったことを列挙された。確かにこれでは忘れろというほうが無理だろう。

「そうか」

「はい」

「・・・」

「では、私はこれで。お仕事お氣をつけて頑張ってください」

思った以上に弾まないまま会話は終了した。それを気にした風も無くエヴァリーナはにこやかにその場を去ろうとした。それを見送り、自分も仕事へ、とクレメンテも背を向けかけ、

「あ」

「・・・た勢いのまま三百六十度回転し、エヴァリーナを引き止めた。『どうかしました?』」

「・・・何かこれから用事があるのか」

「えっ?・・・いいえ、用があって出ていた訳ではないので」

この街に来たばかりなので、暇があれば彼方此方見て回ってるのだそうだ。

「ならば、少々聞きたいことがある」

「・・・お仕事は?」

「向かいながら、聞きたい。付き合ってもらっても構わないか?」
先程とは一変して、訝しげな表情を見せた。警戒しているのか、少し考える素振をする。急な申し入れをした自覚があるので、クレメンテは黙って相手の出方を窺うしかない。

「・・・構いません」

逡巡したらしい間の後、小さいがはっきりした了承の言葉があった。聞いてひっそり安堵したのが自分のことながら珍しいとクレメンテは思った。

+++++

ヴィネスは五つの区域に分かれている。北部には断崖が聳え、それを背に立つ領主邸がある。騎士を始め領主に仕える者が住まう、上流階級の居住区域と言える。門のある東部区域は商人や旅人が立ち

寄る宿屋、酒場が多数立ち並んで雑然としている。その門より真っ直ぐ大通りが伸び、そこを進むと商業地区である中央部。西部に交易船が入る港、南部に一般住宅区域と、大まかだがこのような分け方をする。

ちなみにクレメンテの住居兼仕事場は北寄りの中央部、自治会長宅は西部と北部境、ついでに曲り尾猫亭は中央部のやや南寄りという位置関係である。

目的地は最北部にある領主邸よりやや東に位置する石橋。

「それで、聞きたいことってなんですか？」

歩きながら一向に話し出さないクレメンテに焦れてか、エヴァリーナの方から尋ねてきた。聞きたいことはあっても、話下手のクレメンテである。どう切り出そうかと悩む内に徐々に思考が逸れていき、本来の用件を危うく忘れかけているところであった。

聞きたいのは、二日前の言葉だった。

『左の式では負荷が掛かりすぎて、やがて自壊してしまいますよ』

辞したとは言えクレメンテは国属の魔術師であった。並みの術師では理解出来ない構成も使う。にも関わらず、即興ではあったがクレメンテの術式を一目で理解し、問題点をあっさり指摘した。相当の術知識がなければ不可能なことだそれは。だから純粋な好奇心に駆られている。

「君も魔術師なのか？」

一番簡潔な問い掛けがつるりと吐いて出た。

自分と同等の術知識を有する、自分と同格の魔術師なんて、国内では国家魔術機関最高部にほんの一握り。権力馬鹿か腹を見せない狸爺といったいいけ好かない奴ばかりだった。

では、この娘は？

「……」

「何だ？」

轟音が響き一段と地鳴りが大きくなる。それとは別に何か嫌な気配を感じ、クレメンテ、エヴァリーナ、両者同時に振り返る。

「「ええー!!?」」

水路の水が逆流し溢れた勢いのまま迫り来ていた。

【12】後悔。読んで字の如く、後で悔いる

目前に危険が迫っている場合、人間は必ずしも回避行動を取れるとは限らない。恐怖で足が竦む、突然の事態に思考が追いついてこない、混乱に見舞われ成すすが無い。命の危機に瀕して、体が動かないなんて、人間は生き物としては致命的なのではないだろうか。

「こっちへ、早く!!」

靴底が水に浸ってもまだ啞然としたまま動こうとしなかったクレメンテを、エヴァリーナは引っ張って先導した。纏れる足を懸命に動かして、近くの石造りの塀際まで辿り着く。エヴァリーナが立てかけられていた資材を足場にし、塀の上に器用に登る。次いで、そのあまりに素早い身のこなしに呆氣に取られていたクレメンテに手を貸した。引っ張り上げた反動でぐら付いたエヴァリーナを今度はクレメンテが支える。

ここまでの一連の流れで初めて自主的行動をとったことに、今更ながらはっ、と気が付き我に返った。というか反応が出遅れ過ぎだ、普通年上で男であるクレメンテが避難を促しエヴァリーナを逃がしてやるべきだろう。

「はぁー・・・危なかった・・・」

幅の狭い塀の上にへなりとしゃがみ込んで、エヴァリーナは呟いた。周囲を見渡せば同じように高い場所へ避難した人がちらほら見える。港街では水害の心得もあって当然なのだろう。そうこうしているうちに、水嵩はどんどん増していく。時折何か物が流れて行って、下手をすればあれは自分であったのかとクレメンテはぞっとした。つくづくエヴァリーナの咄嗟の行動に感心するのだが、なんだか自分だけが駄目な気がして微妙に落ち込んだ。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ？ ああ、問題無い。・・・すっかり助けられてしまったな、す

まない」

「いえ、お気になさらず。・・・それにしても、一体何があったんでしょうか」

今だ増え続ける水の流れを見やって、二人して思わず息を呑む。

「・・・恐らく、水路の調整魔導機が壊れてたのだろうな」

自治会長以下住民の懸念通りに。そうならない為の点検依頼をされたクレメンテは歯噛みするしかない。

真っ直ぐ向かえばいいものを個人的な感情で寄り道などするから――。

「真っ直ぐ向かっていたら多分今頃流されてますよ」

冷静な声が掛かってクレメンテは視線を落とす。しゃがみ込んだままクレメンテを見上げていたエヴァリーナが小さく微笑んで言った。

「お仕事って、その魔導機の点検でしたよね？時間的にもう間に合いませんでしたよ、これは。・・・良かった、貴方が流されてしまわなくて」

「しかし、この状況は」

「無事なら何か出来るのでは無いですか？こうしていればとかああしていればとか、そういう反省は後に回せるなら回してしまいいましよう」

「・・・ああ」

目下すべきことは反省でも後悔でもなく事態の収集。指摘を受け漸くクレメンテも落ち着きを取り戻しつつあったが、どうにもぼつが悪い。誤魔化す様に水の流れを遡った先に目をやる。今だ勢いは衰えておらずまだまだ水嵩は増しそうだった。

あの、と小さく声が掛かった。

「故障だけなら修理可能なのでは？」

「その故障の度合いも箇所も分からないのでは動きようが無いな。確認しようにも設置されているのは地下だ」

「見に行こうにも命懸け、いえそれは自殺行為ですね」

地下水路に繋がっている場所から轟々と噴き出す水を見やって、地下に降りることは早々に諦めた。

「・・・水、比較的綺麗ですね」

「汚水が混じっている様子はないな」

上流側にいるといってもこの付近も人の生活圏である。生活排水が混じってもおかしくはないが、水はエヴァリーナの言った通り透明で綺麗だった。ということは、清水汚水を分ける機能はまだ作動している。

魔導機そのものが壊れたのではなく、一部が機能停止しているのかもしれない。

「考えられるのは術式の損傷か？それなら外部からでもなんとか・・・」

魔導機は術で直接水に干渉している部分と、それと連動するギミックを複雑に組み合わせてある。少々大掛かりになるが地上から術を使い応急的に魔導機の修繕を行う。もしそれが失敗しても、ギミック部分が生きてさえいれば大本の水門を閉じることが可能だ。

取り合えずプランは立った。あとはクレメンテ自身が上手く運べばどうにかなるだろう。

「危険だから此処から動くな」

そうエヴァリーナに言い聞かせクレメンテは塀伝いに移動を開始した。・・・一歩踏目でバランスを崩して転び掛ける。後ろでエヴァリーナが支えてくれなかったらそのまま塀から落ちて水に流されていただろう。

「・・・すまない」

「・・・大丈夫ですか？着いていきましょるか？」

「いや、いい大丈夫だ問題ない此処にいろ」

格好付きたい訳ではないが、こうも醜態を晒してばかりいると流石のクレメンテもなんだか遣る瀬無い気分になるのであった。

【13】結局最後までかっこ悪い

轟轟、轟轟、猛る水の流れを遡って辿りひた走る。塀から屋根へ、どこか危なっかしい足取りで。ドナートから渡された地下水路の地図とヴィネス港都の地図を重ね、魔導機のおおその場所を割り出しそこへ向かう。

魔術機関所属の術研究者達に比べれば、クレメンテはまだ体力のある方だった。国属の魔術師として外部に派遣されることも多かった為、自然体力はつくのである。しかし彼はあくまで魔術師だ。目的地周辺まで来る頃には息も絶え絶えになるのも仕方が無い。思両膝に手を付けばガクガク足が笑っていた。

なんとか息を整え前を向く。屋根より見下ろす水流の中心、更にその下から膨大な魔素が放出されているのが肌で感じられた。

腰に下げた袋から平らに研磨された白い石を取り出す。ロープを止めていたピンで石の表面に術を刻み付け、最後の仕上げに自身の魔力を込めながら指でなぞる。ポウと淡い光が灯ったことを確認してから石を置いた。

この石は所謂魔石である。魔石はそれ自体が魔素の塊である為、多くが魔術の媒体や魔導機の核として使用され、魔術師達の間で高価な値で取引されている代物である。といってもクレメンテが携帯しているのは魔素を僅かに帯びている程度の純度の低いもので、通常であれば廃棄される屑石だった。安価で大量に仕入れることができる上、使い方によっては一等級の品に劣らない効果を出すことも可能でクレメンテは重宝している。

屋根を跳び、魔石に術を施し設置し、また移動。その繰り返し。繰り返し。

やがて、それが形を成す。

「・・・こんなところか」

最初の魔石まで、戻ってくる。そこが一番見通しのいい場所だった。魔素の渦を中心にぐるっと一回り囲む様に等間隔で置かれた魔石が淡く輝き続けているのを確認して、ふっと息を吐く。腕を視線の高さまで掲げ、ゆっくり薙ぐと光の軌跡が生まれた。

クレメンテの瞳が大きく見開かれ、刹那、高速で陣を描き始める。徐々に出来上がっていく緻密な光陣は周囲の魔石と共鳴し合い輝きを強くする。更には魔素の渦も勢いを増していき、水流が一層猛り狂っていた。

（・・・これは、拙いな）

魔石を介し魔素を操作し、魔導機の機能を代理させる術式を展開させるつもりだった。その場凌ぎだが一時でも抑えることが出来れば、その間に幾らでも手の打ち様がある。だが魔素の暴走が僅かに早い。クレメンテの術式の展開速度は魔術師の中でも群を抜いている。並列で魔石への干渉を行っていて、尚且つこの速度を保てる魔術師は他に何人も居ないだろう。

しかし、クレメンテには致命的な欠点があった。

「くそ！まさかこんなところで仇になるとは！」

怒涛の勢いで押し寄せる水が街を飲み込むのも時間の問題だ。しかし、まだ術は完成しない。

失敗は、許されない

一度でも構成を間違えてしまえば、そこから綻びが生まれ瓦解してしまう。

もっと、速く

振るう腕の速度を上げる度、自身の魔力と大気の魔素が爆ぜ指先を焼いていく。

速く、速く、速く速く速く速くはやくはやく！！！！

緊張で極限状態にあったクレメンテは背後に人が近づいたことに気づかなかった。

その人物がぬっと描きかけの陣に細く白い指を伸ばした。ぎょっとして動きは止めたものの、なんとか術は保持したのは流石と言うべきだろう。一瞬振り向きかけたが、指が徐に動き陣を弄り始めたのが目に入った。ちよいちよいと指が光の軌跡を弾いて躍らせる。・・

・術が完成した。

「発動呪文を」

「はっ？あ、ああ」

【水流の理よ我に従い此処に成れ】

光陣が輝きを放ち、術が発動する。一拍を置いて、魔石同士が光線で繋がり巨大な陣が出来上がった。

＋＋＋＋

水が轟と大きく唸りを上げたが、後は勢いが衰えていく。徐々に流れが緩くなり、嵩も減っていくのを見て、ほっとして息を吐いた。

「：なんとかなったな」

「そうですね。大丈夫ですか？」

大規模魔術を使った影響で脱力気味の体を振り向かせる。案の定、今更言うのも何だか馬鹿馬鹿しいがエヴァリーナが立っていた。

「：待っていると言った筈だが、何故居る。寧ろどうやって来た」

「え？普通に屋根伝いに」

至極当たり前の事の様に答える。クレメンテはエヴァリーナの背後の街の中心部の方へと目を向けた。二人で歩いていた辺りから此処までの距離に思いを馳せる。

「此処まで？屋根伝いに？」

「他に進みようが無いです。貴方も屋根伝いだったでしょう？」

「それはそうだが」

そういう問題ではない。しかし何を言っても結局この娘はけろりとしていそうで、これ以上は止めておいた。差し当たり聞きたいのはそこではない。

（矢張りこの娘、相当の魔術知識と技りよ、）

「ああああ!!?」

唐突に上がった声に、思考の海に沈みかけたクレメンテの意識は引き戻された。思わずびり体を竦ませたことをこっそり恥じていると、驚かした張本人は勢いよく立ち上がって駆け出している。

「ちよっ、待て!どこへ行くつもりだ!!」

「お店!曲り尾猫亭!イルマさんが!パオロさんが!」

慌てて掴んで引き止めたところ、どこをどうしたのかくると手首を返され、あっさり外される。今日何度目か度肝を抜かれる光景に呆然としている間に、エヴァリーナは行ってしまう。

「走るな、危ない!送っていくぞ!!」

その言葉に踏鞴を踏んでやっと振り返った。

「大丈夫!お構いなく!!危ないですから気を付けて、のんびり帰ってください!それでは御機嫌よう!!」

言い終わるが早いか一礼し再び駆け出し、今度こそ行ってしまった。御機嫌よう、という言葉といい動作に漂う気品といい、良家の子女そのものののだが、足場の悪い屋根を走る姿や魔術知識やらが、なにやら不可解だ。奇妙な娘。失礼ながらエヴァリーナに対しそんな印象を抱いた。

クレメンテが諸々の衝撃から立ち直るまで暫らく掛かった。その間に水嵩はすっかり減ってしまい、屋根の上に取り残され下りられなくなつて近隣住人に救出される羽目になるのであった。

【幕間】 問うたところで無機物は何の返答もしない。答えは結局自分の中に。

「どうも、見回りやってた兵士です！」

「こんにちは、庭師です。前書きに出てこれて光栄です。恐らく二度と登場ないでしょうから」

「いやいやアンタはまだ良いですよ？庭師って数居ないじゃないですか、ちよい役でも出てこれる可能性が残ってますって。俺なんかアレですよ兵士A的扱いですよモブモブ君ですよその他大勢ですよきつと使い捨てですよ」

「そんな、後ろ向き」

「いいんですいいんですモブですら出てこれない奴もいるんですから好待遇です多分。・・・ビジュアルすら描写されてないけどな！！」

「あーえーあー、作中出てきてないですけど私は巨人一族の者です。一族でも小さめです」

「俺は至って平凡な鬼族です。・・・ほらほらほらあ！！絶対アンタもつかい登場出来るよ一個でも設定ついてんだもん！！」

「お、落ち着こう、落ち着いて。・・・あ、本文どうぞ」

「マイペースなところも設定だああああっ！！？」

【幕間】 問うたところで無機物は何の返答もしない。答えは結局自分の中に。

人間が魔界と呼ぶ、魔物が跋扈する地の空はいつも鈍色で日が差さない。大気の魔素と上位種の強い魔力とがぶつかり合い、時折走る雷光が瞬いて刹那の間、大地を白く照らすばかりだ。

そんな地にある魔王城の空中庭園は、魔界においては珍しく光差す場所であった。

＋＋＋＋

庭師によって手入れの行き届いた庭園の一角、低木が囲み守られるように立つ墓碑があった。低木に咲く花々も墓碑も共に純白で、雲間から差した一筋の日差しが当たり、ぼんやりと光っている姿は現実離れた美しさがある。

その光景をルドヴィークは静かに見守っていた。

立ち入ることを躊躇わせる何かがあるような気がして、眩しそうに目を細める。

不意に風が吹いて、日差しが揺らぐ。瞬く間に光の筋は立ち消え、庭園を満たしていた温もりも直に冷めていった。

それでやっとルドヴィークは墓の前に立つことが出来た。

「……久しいな」

本当に久し振り過ぎて、何と声を掛けて良いのか考えあぐね、結果当たり障りのない挨拶をする。十九年最早日課となっていた墓参りを、ここ暫く怠っていた。

「……今日は、報告に、来た。……本当ならばもっと早く、その日の内、いや……直後に言いにくるべきであったんだが……」

もごもと言葉を濁しながら、それでも意を決し告げるべきことを言う。

「エヴァリーナが、あの子が、出て行った」

……。勿論墓碑は何も応えない。ひよう、と風が気まずい空間を更に寒いものへ変えていくようであった。そしてルドヴィークは何故だか焦り出す。

「いや、あの、だ。出て行ったというのは、あれだ、家出した……。ん？自活しているらしいから、自立した？家出と自立と境界はどこだ？ん、あれ？」

花の手入れをしに来た庭師が、ルドヴィークを見つけて引き返していく。やや苦笑いを浮かべて、ああまたやってるのか、と呟いてのそのそ去っていった。丁度庭園に続く渡り廊下にいた見回り兵は、ルドヴィークを見て、ああ久し振りにやってるのだな、と生暖かい眼差しを送った。

詰まるところルドヴィークが庭園の墓の前で挙動不審なのは日常なものであり、家臣一同見てみぬ振りをするのが暗黙の了解だった。

「とまあ、あれだ、えー……。ああ、……。取り合えず出て行っただという訳だ」

適切な表現を選んだら、ごく簡潔な一言となった。これ以上言いようが無い。

「お前の、」

彼の人へ、語りかける言葉があっても、呼びかける名は知らない。

「望んでいた未来に、これで、少しでも近づけたのだろうか？あの子は、自分自身で、羽ばたくことを決めた。全て周囲から与えられるだけの暮らしを捨て、全てを自分で掴む暮らしを選んだ。自分で幸せになる為の道を選んだんだ。あの子なら、きっと幸せになるだろう」

心配だけれども。心配すぎて何も手に付かないのだけれども。でも、そう思う。でも心配だけ。

「……。私から見てだが、美しく優しい良き娘に育ったと思う。い

や、育った。それは断言しよう。けれど、私は良き父にはどうやらなれなかった」

そもそも魔王が、人間の子の良き父になりたかったなどというのは可笑しいだろうか。なあ、お前は思うのだろうか。

名も無き墓へと語りながら、ルドヴィークは十九年前に思いを馳せた。

＋＋＋＋

魔界に迷い込んだ身重の娘。数秒経たぬうちに魔獣の糧へと変わる筈が、難を逃れマグリアの精霊樹の根元へと辿り着いた。それが、エヴァリーナの母である。勝気な娘で、ここが魔界でルドヴィークが魔王であることを知っても臆することなくずけずけと物を言い、あろう事か魔王に取引を持ち出してきた。そこで興が乗って連れ帰ってしまう魔王も魔王であるが。

娘の持ち出した話はこうだった。

自分が持ちえるのはこの身一つと腹の子だけ。自分の全てを投げ捧げる代わりにこの子供に幸せを。

ルドヴィークはそれを了承し、子の幸せを約束した。今にして思えばなんとなんと無茶苦茶で無謀な約束をしたものだろうという気がするのだが、当時はただただ自分に怯えぬ娘が楽しかったのである。

そうして娘は子を産み死んだ。

取り上げられたばかりの羊水と血に濡れた我が子を抱いて、無事産めた安堵の涙を流し、慈愛の微笑みを浮かべ、今際とはとても見えない幸福に満ちた表情をして。

そんな娘の最期の姿に、ルドヴィークは、恋をした。

恋した端から娘は死んだ。死なせてしまった。残ったのは後悔と約

束と、どうやって育てればいいのか検討も付かない赤子。赤子に伝えるべき母の素性も、名前すらも聞いていなかったことに気づいて愕然としたのは後の話である。

＋＋＋＋

別にルドヴィークが手ずから育てる必要はまるで無かったのだ。娘の願ったのは子の幸せ一つ。誰が育てようともそれさえなせば約束は果たしたことになる。外界の適当な人間に養子に出し、適度に援助でもしてやれば、自然人並みに幸せになっただろう。

周囲の困惑と反対を押し切り、ジョリーをも巻き込みエヴァリーナを育てると決めたのは、した約束は果たすという魔王としての意地と、娘との唯一の繋がりを手放したくはなかったから。（当時、そしてついこの間、そんな浅ましい思惑に気づいたジョリーに相当白眼視された）

「いつからだろうな。あの子の父親になりたいと、真剣に思うようになったのは」

本当にいつからだろう。初めておとうさまと呼んでくれた時からだろうか、微笑みかけてくれた時だろうか、掴まりだ立ちをした時からだろうか寝返りをうった時だろうか。

結局良い父親所か、父親を名乗る資格もあるかどうか分からなくなってしまうたのであるが。父と呼び慕ってくれたエヴァリーナを、裏切る仕打ちをしたのはルドヴィーク自身で、弁明のしようが無い。うじうじうじそうやって悩んで十数日。結果的にエヴァリーナの独り立ちを決心させ、背中を押したようなものだからもう気にしなくていいんじゃないか、と言われたが、それはそれとしても悩まずに居られず凹みっぱなし。伴って報告もずるずると先延ばしになって今日になった。

はっ、と。自嘲なんだか、ため息だか吐息を漏らし、改めて背筋を伸ばして告げる。

「一人でやっていけるだけの知識は教えた、・・・ジョリーが。一人で生きていけるだけの力は付けた、・・・ジョリーが。度胸も普通以上で、お前並にあると思う・・・寧ろお前に似たのか・・・だから、あの子は大丈夫だろう。私も、悩むのは今日で止めて、信じることにする」

宣言することで、思いは強くなった。

「もし、あの子に何かあれば、当然助けるつもりでいる。けれど、私はこの地を統べる者。出来ることも限られてくるだろう。私の力及ばない所は、お前が見守ってやってくれ」
なんと滑稽なのだろう。魔王が死を悼み、死者に祈り願う。

けれどその姿は、酷く愛しく美しかった。

やわりと再び日が差して、墓所とルドヴィークを白く照らした。もう無い筈のぬくもりを感じて、一人笑みを零した。

【番外】おとうさまとおじさまとわたし（前書き）

数年前のお話。皆一緒だった頃のお出掛けの一幕。

【番外】おとうさまとおじさまとわたし

昼下がりの穏やかな空気の大通りを疾駆する男が居る。のんびりと露天を冷やかして歩く通行人の間を縫うように速度を落とさず避けて通る姿はしなやかな野生の獣を思わせた。通行人はまず男の身のこなしに目を引かれ、次いでその男の肩に担がれる金の少女に驚く。すわ人攫いか、と騒ぐ間も無く風のように去っていく二人を皆呆然として見送るばかりであった。

赤地に種種の色糸で大輪を織り咲かせた風変わりで派手なローブが、少女の持つ黄金の髪と共に靡いて、酷く美しい。もっとも走っている男も、担がれている少女もそんなこと今はどうだって良かった。

「お、おじっおじさ、まー！はや、いー！！」

「舌噛むから黙ってなさい」

極力揺らさぬように気を使って抱いてはいるが、全力疾走していればその気遣いは無に等しい。いい加減上下運動に酔ってしまわぬうちに目標を確保しなければ、男は更に速度を上げていった。・・・担がれた少女が声にならない悲鳴を上げて青くなっているのを見て見ぬ振りをして。

その二人の進行方向の、大分距離を空けた先。いかにも胡散臭い露天の、いかにも胡散臭い商人が推す、いかにも胡散臭い骨董品を購入しにかけている男が一人。銀髪銀目の美丈夫は己の美貌に集まる周囲の視線を物ともせず、身振り手振りで怪しげな調度品を薦めてくる商人の口上を熱心に聞いている。（視線の何割かは『あんただまされてるよ』という呆れや同情であった）

黙って話を聞いていた男は、やがて決心が着いたのか深く頷いて見せた。

「幾らだ？」

商人の口元にそれとは分からぬ勝利の笑みが浮かんだ。

「はい、2000「はいはいはい確保うつ!!!」
商人が値を言い切る前に少女を担いで走ってきた黒髪の男が、銀髪の男の首根っこを通りすがりにぐわしと掴んで、問答無用で引きずっていった。引っ張られている方が喚こうが騒ごうが聞いちゃいない。振り回されて壁に激突していても気にしちやいない。
正に一瞬の出来事に商人はぽかんとしたままカモにし損ねた男を見送るしかなかった。

+++++

「お前らねえちよといい加減にしてくれませんか？」

人々の憩う広場の片隅でジョリーはぐったりと疲労を隠さぬ顔で言った。その目の前にはエヴァリーナとルドヴィークが二人並んでちよこんと座り込んでいる。大通りから強制的に連れてきて有無を言わさず説教タイムへと移行したのである。それに際し座らせたのだが、エヴァリーナが膝を抱えているのに対して、ルドヴィークは正座。何も言わなくても座りなさいと言われて黙って正座してしまうあたり、日常的にお小言を賜っているらしかった。

「エヴァ」

「はいっ!!」

手始めに、とばかりに名を呼ばれてエヴァリーナはびくりと体を揺らす。

「目離してごめんな。怖かっただろ」

「・・・え？」

てっきり叱られるものとはかり思って身を竦ませていた為、突然の謝罪に目を見開く。

「・・・おこって、ない？」

「怒ってます。人ごみでうろろしないって約束、守らなかったでしょう？」

普段目にするこの無い露天の品々や人々の活気に浮かれて気がつ

けば一人、人並みに流されてしまったのはエヴァリーナである。そうして迷子になっているエヴァリーナに最初に気づいたのは、運の悪いことに破落戸だった。暗い路地に攫われる寸前に、ジョリーが見つけて助け出したのだ。

「でも、保護者の俺やルドが一瞬でも見失ったのは失敗だった。監督不行き届きだね。だからごめん、ごめんなさい」

目を丸くする中、ジョリーはすっかり頭を下げ謝罪を述べる。呆然とジョリーの挙動を見ていたエヴァリーナだったが、我に返り慌てた。

「そんな、おじさまは悪くないです！！わたしが、わたしが約束、守らなかったから・・・」

「はいはい止まんなさい。どっちが悪いかなんて言い出したら水掛け論になっちゃうから。君は俺の謝罪を受け取って、許して、それから今後はちゃんと約束守ること。それでお仕舞い。それでいい？」

「・・・はい」

「それじゃ仕切り直して。・・・ごめんなさい。許してくれるかい？」

「はい、許します。それから、これからは迷子にならないように気をつけます。約束も守ります」

「本当にね、気を付けてね」

漸くほっとしたようにへにやりと笑うエヴァリーナにジョリーも表情を緩める。その二秒後、笑みがニヒルなものに変わる。

「俺、ルドのお守りで結構手一杯一杯だから」

「おい」

「情けない話ではあるんですけども、ねえ？本気でしんどいの。だからエヴァにしっかりして貰えると大変助かったりします」

「おい」

「はい！おじさまの負担をこれ以上増やさないように頑張ります！だから元気出して下さいおじさま」

「有り難う、エヴァはいい子だねえ。いい子過ぎてついつい甘えち

やうよ、ごめんね」

「おいて、」

「いいえ、私のほうがずっと甘えています。あ、私がすっかりすれば一緒におとうさまのお世話が出来ます！それならおじさまも少しは楽になりませんか？」

「おお、それもそうだねえ、ってそこまで頼っていいもんだかなんだ、」

「お前達和やかに談笑しながらさらっと扱き下ろすな！！私のこと为一体なんだと思っている！！？」

それまで空気扱いになっていたルドヴィークが微笑みあう二人の間に怒鳴り分け入った。構ってもらえなくて寂しかったらしい、若干涙目になっている気がしなくも無い。きよとんと二人して振り返る。小首を傾げる仕草が全く同じで、それが余程憎たらしいのかルドヴィークは齒軋りしていた。

「大体言うに事欠いてお守りだと？どこまで馬鹿にすれば気が・・・」

「はっはっは、馬っ鹿お前迷子ほったらかしにして意気揚々カモラれ掛けてた奴に発言権があると思うなよ？」

朗らかに笑い上げながらも全く温度を感じさせない声に、ルドヴィークはピシリと動きを止められた。だらだらと流れ落ちる汗を止めることが出来ない。怒っているのか、いや怒っているだろう。だがしかし待て、放って置いた訳ではなくお前が待っていると言って一人駆け出して行ってしまっただな、その間が淋、じゃ無くて退屈だったというかそんなときあの露天商に声を掛けられてだ、いい品があると言うからついふらふらと・・・

「ルド」

魔王を唯一愛称で呼ぶ彼ののほほんとした笑顔。その背後にブリザードが吹き荒れているのが見えた気がした。

【14】事件のその後

魔導機の暴走による水難事件から一週間程。ざっと被害を並べると、荷の流失、床上下浸水等の家屋損傷、損壊、重軽傷者十数名。幸い死者は出なかった。

ちなみに曲がり尾猫亭の被害は、パオロが水路に落ちて流されたくらいである。海までノンストップの激流下り。奇跡的に無傷。

「全く。ぼんやりしてんじゃないよ、みっともない」

それも急激に嵩の増した水に驚いて足を滑らしたといううっかりっぷりで、イルマの小言はいつまでも絶えず続く。もっとも言葉の裏に本当に心配していたという気持ちと、怪我が無くて良かったと安堵が見え隠れしていて、無口な亭主は大人しく小言を賜っていた。そんな仲の良い夫婦を横目でエヴァリーナは微笑ましく見ていた。というのも、義父を筆頭に身近な者は基本独身者ばかり。他は戦で伴侶をなくしたやもめだとか、そもそも番の概念がない、もしくは薄い種族だったり。世話役の妖魔達の、刹那的な男女の駆け引きならそれなりに見慣れたものであったのだが、一般認知される普通の愛だの恋だのといったものは殆ど見たことが無い。故に円熟した夫婦愛というものに憧憬らしきものを抱いても仕方ないだろう。さて、このようにして曲り尾猫亭は事件の影響を然程受けなかった為、エヴァリーナ自身がすっかり忘れてしまっていた。自分がその事件を収めるのに一役買ったことを。

＋＋＋

立地からして曲り尾猫亭の客は職人が多い。彼らの大半はここ数日、街の修繕に駆り出されている為、のんびりしている暇は無いのか入れ替わり立ち代り搔っ込むようにして飯を食い仕事へ戻っていく。

忙しいがお陰で客の回転が早い。最近のエヴァリーナ目当ての客に不満が溜まっていたイルマなどは、だらだら居座れるよりはずっと良いと笑っていた。

さて昼食の喧騒が過ぎた頃である。漸く最後の客を帰して掃除を始めようかという段になって、訪ねてきた男が一人いた。

常変わらぬ眉間の皺を携えた仏頂面の無愛想男、クレメンテである。昼の営業は終わりましたよ、とエヴァリーナがやんわり告げると、知っていると答えた。

「今日は君と話がしたくて来た」

故に手が空く時間帯に合わせの来訪だと。この間も似たことがあったと思いながら食堂へ通す。そのとき結局魔導機の暴走で有耶無耶になってしまった『魔術士なのか?』という質問を改めて問いに来たのだろうか。クレメンテに見えない位置でなんだか面倒なことになるたな、とエヴァリーナは顔を顰めた。

顔を覗かせたイルマに、話をするから場所を借りる旨を伝えて、奥に戻って行くのを見送るとクレメンテの向かい側に座る。

「それで、ご用件のほうは?」

前回の会話で口下手なのが分かっていたのでエヴァリーナの方から話を切り出す。

「・・・まずは、魔導機暴走の一件についてだ。礼を言えていなかった」

助力に感謝する。と神妙に言われて、エヴァリーナは目を丸くしてクレメンテを見つめるしかなかった。礼を言われる程大したことをした意識がまるで無かった為驚いたのだ。

淡々とした表情のまま、クレメンテは事件後の詳細を語り始めた。あの時施した術はあくまで応急処置である為、水嵩が一定まで減った後、地下に潜り直接魔導機の修理を行ったそうなのだが、遅れてやって来た地元自警団及び騎士と何故か揉めたそうだ。水位が安全域まで下がった頃、更に領主の顧問魔術士もしゃしゃり出て来て事態がよく分からない方向へ転がりだした所を、駆けつけたドナート

がその場を収めたらしい。

「後日、領主を交えての会談があったが、・・・終始責任の擦り付け合いだったな」

住民側は再三点検の申請をしていたのにも関わらず、放置状態を続けたのが今回の騒動を引き起こしたのだと、主張する。しかし役人側とて、はいそうです私も悪う御座いました、などと言える筈も無く。

『魔導機点検の申請はすでに通して権限はそちらに移っていたのだから、今回の暴走事故の責任はそちら側になるのではないか』という主張が出たそう。

「技師として、依頼を受けていた私にも責任の追及があった」

「殆ど言いがかりじゃないですか、それ」

「そうだな。だが役人なんてそんなものだ。・・・まあ、最終的に自治会長が双方上手く丸め込んで話をつけた」

最後の方はドナートの独擅場で、領主ですら口を挟む隙がなかったのだという。やって来てはよく回る口でお喋りをしていくのを見ているので、そこでもそんな感じだったのだろうかと言えりナは想像した。

【15】その後の途中

「色々大変でしたね。お疲れ様です」

クレメンテの来訪を面倒事だと感じはしたが、その人こそが面倒事に巻き込まれていたとなると、素直に劳いの言葉が出てくる。言われた方といえれば何やら妙な顔をしていた。

「他人事みたいに言うな」

ついさっきまで当事者であったことすら忘れてました、とは流石にエヴァリーナも言えず、曖昧に笑って誤魔化した。

「兎に角、だ。君の介入が無ければああも速く術は完成しなかった。被害もその分減らすことが出来た」

「少しでもお役に立てたのなら何よりです」

「――何か礼がしたい」

「いえ、そんな。お礼をして頂く程の大したことはありませんよ」
本心からそう言ったのだが、クレメンテはびきりと固まった。強張った顔を隠すように片手で目元を覆い、もそもそと呟く。

「曲りなりにも国最高峰の機関に所属経験のある魔術師の高等術式を見ただけで解説理解し構成を弄りより完成度の高いものに仕上げたのは『大したこと』じゃないのか・・・」

魔術士という人種は自尊心が強い生き物である。今更ながら思い出して、しまったと思ってももう遅い。エヴァリーナの『大したことはない』発言は甚くクレメンテを抉ったようだった。

これは何かフォローをすべきなのか。しかし、ここでエヴァリーナが何か言っても却って白々しい気がする。どうしたものかと途方に暮れていると、クレメンテはそろりと視線だけを上げた。もうこの際はつきり聞いておこう、と前置きがあった。

「君から見て、私の術式はどう思う？率直な意見を聞きたい」
何と言おうべきなのだろうか。

「・・・複雑だと、思いました」

「遠慮せず、はっきり言ってしまうて構わない」

「え、ええーじゃあ、一言で言って、無駄が多い？」

「・・・」

「もっと言うなら、そうですね。全体が緻密に計算された構成になっていて、複雑なんですけど綺麗には纏めてますよね。寧ろ纏めて一つの術式に収めた辺りは凄いと思いますよ。この間使っていた大規模術式も、分割したら七つ位に分けられるし。消費魔力量・魔素変換量・その他諸々、全て上手く兼ね合わせ威力・効果を上げられるだけ上げる。クレメンテさんの術式はそう考えて作られているように感じます。でも、えっと、詰め込みすぎているというか、発動に物凄く時間が掛かりますよね。実際あの事件の際も、あれだけ高速で詠唱と術式展開をしていたにも関わらず発動が遅かった。技師として魔導機に施すのであれば多少時間が掛かって問題はありませんが、緊急事態においてはその時間が致命的です。あと複雑すぎて作成者、クレメンテさんしか使いこなせる人が居ないのではないですか？・・・あの、クレメンテさん？大丈夫ですか？」

私見をつらつらと並べて立てていけば、どんどん項垂れていく。最終的にテーブルに突っ伏してしまったクレメンテは、一言『参った』と言ったつきり動かなくなってしまった。覗き込んでも顔は隠れている。

「クレメンテさん？」

「・・・見事、に、言い当てられてしまったな」

顔を上げないまま、がしがしと頭を乱雑に掻き回す。その姿は落ち込んでいるというより拗ねて不貞腐れているように見えた。

「発動に時間が掛かる、他人が使用できない、というのが私の術の欠点でな」

前職では新しい魔術理論や術式の開発に携わっていたが、エヴァリナーの指摘通りクレメンテの作り上げる構成は複雑過ぎ、他人では解読困難であったり、使用がかなり制限される代物だった。故に上

の人間から効率化、簡略化を求められたのだが、改良した結果更に複雑になるなんてざら。扱いづらいことこの上ないと周囲から次第に疎まれていった。

「だから、辞めた。私は好きに研究さえ続けられれば、何だって構わないから、別にそれはいいんだが。まさか王都から移ったその先で、自分より優れた術者に出会い、完膚なまでに打ちのめされることになるとは思わなかったな」

しかも自分より年下の、魔術とは縁遠うそうな女性。些かクレメンテの自尊心を傷つけはしたが、それ以上に興味を抱かせた。

「この間の質問の続きになるが、習ったと言ったな？どんな人に師事したんだ？」

「・・・養父の友人です。私も小さい頃からお世話になりました」

「高名な方か？」

「いえ、よく知りません。表に出ることを厭う方でしたから、知っている人がいても極少数なんじゃないかと。でも、そうですね、私に教授して下さる以外は殆ど使用しませんでしたけれど相当の腕前だと思います。知識面でも技術面でも」

「ほう？君がそう言うのであれば余程のものなのだろうな」

「色々と規格外で無茶苦茶な人ですけどね」

エヴァリーナは話しながら思いつく。術式二百くらいなら楽勝で同時に展開出来るよ、とさざりと言ったときの小父の笑顔を。薄ら寒いものを背筋に感じて慌てて打ち消す。

「あ、術式構成については特に集中して教わりました。そこを理解しているか否かで大幅に違いが出るって言って」

「解読にも力を入れていたか？」

「ええ」

「成る程な」

先天的素養が必要な魔法と違い、魔術は訓練さえ受ければ基本誰にだって使用は可能だ。補助具があればより容易に、更に魔導機であれば訓練の必要すらない。故に魔術そのものについての知識を持た

ない者も非常に多かった。使えさえすれば問題無いという自称魔術師もいたりする。だが矢張り学んでいるか否かで使用効果が桁違いに変わる。

解説と簡単に言ってしまったているが、エヴァリーナのそれは数段高度である。紙面上の図案を時間を掛けて読み解いていくのとは違い、実際展開途中の術式を見てそこから発動後の効果、威力をものの数秒で読み取ってみせた。しっかりと基礎知識が身に付いているだけではなく、咄嗟の機転が利く応用力と判断力。

「知っているだけじゃ勿体無いって言われまして、実際の活用の仕方まで教わりました」

「・・・」

これはそこら魔術師よりも遥かに強いのでは？とクレメンテは思った。そしてそれは思い違いではない。魔術・魔法に限定すればエヴァリーナは高位魔族と同等以上の実力者である。

「まあ、今の職じゃあ使い所もないですし、本当に習っただけになっ
てしまいましたね」

ころころと無邪気な微笑を見て、ぽつりと「勿体無い」とクレメンテは呟く。鸚鵡返しに「勿体無い？」と聞き返したエヴァリーナを気にせず、クレメンテはふむ、と一人頷いた。

「なあ、君。私の所で働かないか？」

突然すぎる申し出に、エヴァリーナはぽかんとして、至って真面目な顔の魔術師を見つめ返すことしか出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8014o/>

まいであとうたーBY魔王

2011年10月7日05時15分発行